

長谷川端蔵 『源氏物語』 岡本主水筆 「蓬生」 「手習」

玄陳筆 「関屋」

長谷川 端（文責） 駒田貴子

村井俊司

解題

一、書誌

ここに翻刻するのは、長谷川端蔵『源氏物語』五十四帖揃、付『源氏物語筆者目録』『源氏物語秘訣』各一冊の中の岡本主水筆「蓬生」「手習」、玄陳筆「閑屋」である。

「蓬生」は綴葉装、縦二十三・六糎、横十八糎。表紙は吉祥文の布表紙、見返は本文共紙、料紙は鳥の子である。題簽は、中央右寄りに円形を描いた下絵に、「よもきふ」と墨書きする。全丁数は三十一丁、墨付二十八丁、遊紙前一丁、後二丁。内題はなく、一面十行、和歌は改行して二字下げで記し、そのまま本文を続けている。字数は七、二十四字、字高は十九糎。奥書、識語はない。

「閑屋」は綴葉装、縦二十三・六糎、横十八糎。表紙は吉祥文の布表紙、見返は本文共紙、料紙は鳥の子である。題簽は、草木を描いた下絵に、「せき屋」と墨書きする。全丁数は八丁、墨付五丁、遊紙前一丁、後二丁。内題はなく、一面十行、和歌は改行して二字下げで記し、そのまま本文を続けている。字数は五、二十四字、字高は十九糎。奥書、識語はない。

「手習」は綴葉装、縦二十三・六糎、横十八糎。表紙は吉祥文の布表紙、見返は本文共紙、料紙は鳥の子である。題簽は、中央上部に金銀で山里の景を描き、下部には金で草木、銀で籬を配する下絵に、「てならひ」と墨書きする。全丁数は六十九丁、墨付六十七丁、遊紙前後各一丁。内題はなく、一面十行、和歌は改行して二字下

げで記し、そのまま本文を続けている。字数は二二三字、字高は十九糎。奥書、識語はない。

なお、この『源氏物語』五十四帖揃の昌琢筆「桐壺」⁽²⁾、玄陳筆「帚木」⁽³⁾、玄的筆「空蟬」⁽⁴⁾、岡本主水筆「夕顔」⁽⁵⁾、「若紫」⁽⁶⁾、「賢木」⁽⁷⁾、「明石」⁽⁸⁾、「潯標」⁽⁹⁾、「橋姫」⁽¹⁰⁾、石井了俱筆「未摘花」⁽¹¹⁾、西山宗因筆「紅葉賀」⁽¹²⁾、「宿木」⁽¹³⁾、左馬助筆「花宴」⁽¹⁴⁾、東寺觀智院筆「葵」⁽¹⁵⁾、北左平次行生筆「花散里」⁽¹⁶⁾、大鳥居信岩筆「須磨」⁽¹⁷⁾は、既に解題を付し翻刻した。

二、岡本主水の書写と本文のミセケチ・補入等

「蓬生」「手習」の書写者、岡本主水の伝記については、「夕顔」⁽¹⁸⁾を翻刻した際に触れたので省略するが、ミセケチ、補入等に着眼して、ここに翻刻した「蓬生」「閑屋」「手習」の三巻におけるその数を調べると次のようになっている。参考のため、以前調査した「桐壺」から「潯標」に「宿木」「橋姫」を加えた表も掲げた。

巻	書写者	ミセケチ	補入	傍書	合点	朱点	総計
蓬生	岡本主水	71	28	5	6	14	124
閑屋	玄陳	4	5	2	2	6	17
手習	岡本主水	120	64	11	18	143	356

巻	書写者	ミセケチ	補入	傍書	合点	朱点	総計
桐壺	昌琢	2	7	0	1	47	57
帚木	玄陳	0	0	2	0	0	2
空蟬	玄的	0	1	0	0	0	1
夕顔	岡本主水	76	48	2	14	113	253
若紫	岡本主水	70	49	10	14	150	293
末摘花	了俱	2	0	1	0	0	3
紅葉賀	宗因	48	29	4	7	28	116
花宴	左馬助	7	3	1	10	2	23
葵	観智院	4	4	8	3	0	19

巻	書写者	ミセケチ	補入	傍書	合点	朱点	総計
賢木	岡本主水	94	55	6	21	59	235
花散里	行生	2	2	1	1	4	10
須磨	信岩	34	33	11	55	84	217
明石	岡本主水	79	40	9	25	99	252
潯標	岡本主水	55	17	6	5	64	147
橋姫	岡本主水	101	25	17	10	49	202
宿木	宗因	22	19	12	0	0	53

今回翻刻した「蓬生」「閑屋」「手習」の三巻について見ると、主水が書写した「蓬生」「手習」は、「夕顔」「若紫」などと同じく、ミセケチ、朱点等が非常に多いとわかる。

また、玄陳は以前に翻刻した「帚木」も書写しているが、表でわかるように、「帚木」は、総計が二つと極端に少なかった。「帚木」に比べれば遙に分量が少ない「閑屋」の十七という総数は、多いといえる。

そして、今回翻刻した三巻には、「須磨」「明石」など最終丁にあった「二更」という記載はない。

これらミセケチ、朱点等についての見解や結論は、やはり、すべての巻の調査の後、または、更に多くの巻の傾向を把握した後にするとして、「若紫」の解題で述べた岡本主水の書写した巻は校正がなされ、ミセケチ等が多いという事実をここでも確認し、留意しておきたい。

三、玄陳筆「関屋」本文 写本との関係

玄陳筆「関屋」は、定家様の美麗な書写がなされている。玄陳の伝記については、「帚木」を翻刻した際に触れたので、ここでは、本文について考えてみたい。この『源氏物語』揃の本文については、以前、西山宗因筆「紅葉賀」の「解題」で、本書と三条西実隆、紹巴ゆかりの四本とを対校して、その関係を考えた。そのため「関屋」でも四本との対校を行ないたい。

今回は、最初に『源氏物語大成』²⁰で、本書と諸本との関係や特徴を確認し、次いで、四本との対校を行ないたい。そして最後に、本書より後の成立となる江戸時代の版本との異同を調べ、本書を『源氏物語』本文の流れの中に位置づけたいと思う。

『大成』は、周知のように青表紙本、河内本、別本の三つに分類している。そこで先ず確認しておきたいのが、本書が青表紙本であるという点である。この「関屋」に於いて、青表紙本と河内本の違いが如実にわかるのが、巻末である。

青表紙本 あいなさかしらやなとそはへるめる

河内本 あめる

本書は「あいなのさかしらやなとそはへるめる」で、青表紙諸本と一致する。また、『大成』には大島本と、全
ての河内本との違いが見られる箇所として、四十五の部分が掲げられている。この中で本書と一致するのは、
「心（大島本）」が「御心（河内本・本書）」となっている一箇所のみである。この点からも本書は河内本の流れ
ではないとわかる。後に触れるのでここに記しておくが、この箇所は青表紙本の肖柏本、三条西本でも本書と同
様「御心」となっている。

そして、次に掲げるのは、本書と河内本としてよく知られる尾州家本⁽²⁰⁾と中京大本⁽²¹⁾では大島本⁽²²⁾、
成」に採択されていない飯島本の異同を調べた表である。項目の「漢字仮名」は、漢字で書いてあるか、ひらが
なで書いてあるかの相違の数である。「送り仮名」は送り仮名の表記の相違の数であり、「表記」は音便、「く」
などの相違の数である。この四項目に該当しない相違を「その他の相違」とした。

	漢字仮名	尾州家本	中京大本	飯島本
送り仮名	7	81	70	100
表記	43	35	3	10
その他の相違	71	75	82	29
総計	202	183	221	100

後に青表紙本の同様の調査表を掲げるが、それと比べると相違数が多い。それはいうまでもなく本書が、青表紙
本に属するからである。

その青表紙本で『大成』が「関屋」の校異に採択している本は、六本ある。六本の中で、肖柏本、三条西の二
本が、前掲のように本書と同じく「御心」となっていた。これは二応、本書が肖柏本、三条西本に近い証左であ

るといえる。この二本と本書が近いという点を含めて、次に青表紙の諸本と本書との関係を考えてみたい。

『大成』に青表紙本の相違箇所として取り上げられ、本書も該当する部分を抜き出すと、次のようになっている。本書と同じ本には「」を付した。

大島本		本書	三条西本	肖柏本	横山本	榊原本	池田本
いさゝか	か	いさゝか					
給ふへし		給 _ふ へし					
せき山		せき					
すくし		すくし					
くつれいてたる		はつれいてたる					
いま		ナシ					
まいりてそ		まいれり一日					
心		御心					
あたりつる		あたり一日					
かはちのかみ		かうちのかみ					
をきし		をきしを					
すくし		すくし					
総計	10		8	6	5	5	

この表からも、三条西本と肖柏本と共通する箇所が多く、本書に近いといえる。このように、『大成』によって本書の系統を確認すると、青表紙本で三条西本と肖柏本に近い本文であるといえる。

三条西本は三条西実隆が書写した本であり、その実隆は肖柏から『源氏物語』の講釈を受けており、二本が近いのも首肯できる。そして、その流れに本書は繋がるといえる。

ところで、この三条西実隆の書写に関係する本と本書について取り上げたのが、先に記した「紅葉賀」の解題で対校した四本である。この中の一つが、今見てきた『大成』に三条西本とある本で、現在は日本大学蔵のため、先の解題では日大本⁽²⁴⁾とした。

以下、この三条西本（日大本）を含め、先の「紅葉賀」と同様に、本書との異同を調べたのが次の表である。今回は、『大成』が底本として採用している大島本⁽²⁵⁾、『大成』に採られていない青表紙本で、三条西本とは系統が違う正徹本⁽²⁶⁾と、別本で「関屋」は青表紙本だが、巻によっては河内本も交じる伏見天皇本⁽²⁷⁾を参考として掲げておいた。また、蓬左文庫にはもう一本、紹巴奥書の青表紙本があり蓬左本⁽²⁸⁾として、それも加えた。

	漢字仮名	三條西本	鶴見大本	蓬左本	蓬左本	書陵部本	大島本	正徹本	伏見本
清濁			52	77	80	66	76	92	88
朱点	6				1		2		
送り仮名	2	3		2	5	5	11	3	16
表記	35	26		32	23	12	13	15	38
その他の相違	6	4	6	7	11	8	21	22	
総計	134	85	117	116	94	215	131	164	

この表は、本書との相違を示した数字であり、数が少ない本ほど、本書と近似しているといえる。濁点、朱点を全く付さない本もあり、その点を勘案する必要があるが、総計の部分を見れば明白なように、本書に近い本文を有するのは、鶴見大本⁽²⁹⁾、書陵部本⁽³⁰⁾、蓬左本⁽³¹⁾、蓬左本の順である。鶴見大本が本書と最も近いという結果は、先の「紅葉賀」と同様である。

その理由としては、「紅葉賀」の解題でも述べたが、本書の書写者が玄陳であるように、この『源氏物語』揃は、紹巴の子孫が書写の中心になっている。そのため書写の際には、紹巴に係する『源氏物語』の本文が使用されていたと考えられる。鶴見大本は、「天正十四年丙戌年」「紹巴講釈本」と記された奥書を有する寛永頃の書写とされる本であり、里村家に関係の深い本であるためだといえる。

その紹巴は三条西公条から『源氏物語』の講釈を受けており、三条西家の『源氏物語』に遡るのも容易である。三条西本（日大本）、蓬左本、書陵部本は、何れも三条西実隆ゆかりの本であり、紹巴と三条西家との繋がりを考慮すれば、「紹巴講釈本」と言われる鶴見大本や本書が、実隆ゆかりの三条西家の本に類似し、その流れに位置づけられるのも自然な帰結と考えられる。

四、江戸期の版本との関係

青表紙本の本書に至る系譜については前に触れて来たが、ここでは、本書より時代が下る江戸時代の版本の本文と、本書との関係を見てみたい。『源氏物語』の近世の版本については、池田利夫氏³²⁾、清水婦久子氏³³⁾に指摘がある。清水氏の指摘を基に列記すれば、次のようになる。

- 一 慶長中期頃刊、古活字版（伝嵯峨本）
- 二 元和九年（一六三三）刊、古活字版
- 三 寛永（一六二四）一六四四）頃刊、無跋無刊記整版本 無刊記本

- 四 慶安三年（一六五〇）山本春正跋、絵入り。³⁴ 承応本
- 五 万治三年（一六六〇）刊、絵入り（横本）³⁵
- 六 無刊記小本、絵入り 絵入小本
- 七 承応元年（一六五二）松永貞徳跋、版本『万水一露』³⁶ 万水
- 八 寛文十三年（一六七三）刊『首書源氏物語』³⁷ 首書
- 九 延宝元年（一六七三）北村季吟跋『湖月抄』 湖月抄

この中の を付した版本と本書とを対校し、異同の数を示したのが次の表である。その際、四は一般に「承応本」と呼ばれるため、その呼称を用い、六は「絵入小本」とした。

	漢字仮名	清濁	送り仮名	表記	その他の相違	総計
無刊記本	107				6	149
承応本	108	177	7	31	10	333
絵入小本	92	173	7	30	11	313
万水	126		3	25	10	164
首書	105	187	6	22	8	328
湖月抄	118	171	4	29	7	329

無刊記本、『万水』は、濁点を付さないために数が少なくなっているが、この清濁を含め、漢字ひらがなの違い等の表記の相違は、本文の内容に及ぶ異同ではなく、これを除外して、項目の「その他の相違」に入れた、

「くきみ」（本書） 「くきみいまは」（承応本）

というような用例に注目すれば、無刊記本との相違が六と最も少ないのである。更に、本書との関係を容易に識別できる部分として、「せき」とするか「せき山」とするかという箇所がある。ここまで本書との対校に用いた全ての本に『源氏物語別本集成』³⁸⁾『源氏物語別本集成続』³⁹⁾の諸本を加え掲げれば、

せき 本書・大島本・三条西本・鶴見大本・蓬左本・蓬左本・国冬本・肖柏本・伏見天皇本・保坂本・無刊記本

せき山 書陵部本・正徹本・陽明本・池田本・御物本・前田本・天理河内本・穂久邇文庫本・高松宮本・麦生本・阿里莫本・源氏物語絵巻詞書・承応本・絵入小本・首書・湖月抄

となっている。ここでも無刊記本は、版本として唯一、本書と同じく「せき」となっている。この点から無刊記本が本書に近いと考えられるが、「その他の相違」の数は、最も少ない無刊記本の六から十一の範囲であり、その幅は大きくないといえる。その理由としては、全て青表紙本であり、清水氏⁴⁰⁾が、

これら整版本の本文に、二通りの流れが見られることである。一つは慶安本「絵入源氏」の流れで、これが後の流布本になってゆく。もう一つは無跋無刊記本の流れで、これは『万水一露』の本文として採用され、『万水一露』を通じて『首書源氏』『湖月抄』ともに校訂に使用されるが、後の流布本にはならなかった。このうち流布本の源流とも言つべき、慶安本「絵入源氏」の親本の一つは、伝嵯峨本と思われる。

という指摘でわかるように、その繋がりも認められるからだといえる。また同氏には、「『絵入源氏』桐壺巻の本文は、三条西家本にもっとも近く、次いで肖柏本が近いということがわかる。」という指摘もある。この三条西家本、肖柏本に近いという結果は先に触れたが、本書にもあてはまる。つまり、本書も『絵入源氏』等の版本も三条西家の証本を継承しているのである。ここまで見てきた本書と版本との対校によって、三条西家の証本から、

江戸期の版本へという流れの中での本書の位置が、明らかになるといえる。

五、結語

『醒睡笑』の著者として知られる安楽庵策伝に、『策伝和尚送答控』⁽⁴¹⁾という書がある。策伝の自筆で、一部を除き、和歌一首の上句を一行、下句と作者を一行に記すという形式で綴られている。その内容については、中村幸彦氏⁽⁴²⁾に、

時折の詠、主として諸知己と送答の和歌狂歌、時に漢詩俳諧を記し止めたもので、時には草案の控、時には即答の後の筆記、書簡つきのものは、そのまま写してある。又記憶すべき諸事を記しとどめた所も若干ある。という解説がある。この『策伝和尚送答控』の中に、

玄陳法橋

おもひやる心の色のふかきをもうす紅葉とや人の見るらん

伝

返し

心ありてたをれる枝の紅葉々はほかにさきたつ色とこそみれ 玄陳

という、策伝と玄陳の贈答歌がある。この贈答歌の背景について、鈴木棠三氏⁽⁴³⁾は、

家集に錦上花を添えようとして、(中略)昌琢・玄仲・昌俔・玄陳・玄的・宗順といった連歌師たちも動員されることになる。この人びとは、いずれも返歌をもとめるために策伝の方から詠みかけたとみられるようである。

と指摘する。ここでいう「家集」は『策伝和尚送答控』を指し、「錦上花を添え」とは、同氏が「当時の連歌師の社会的位置は、のちの俳諧師などとは比較できぬ程高かったし、連歌は文芸の表芸というべき評価をえていた」という連歌師の高い地位が前提となる。

この玄陳ら『策伝和尚送答控』に名前を連ねている人々については、中村氏に、

この送答の行われた寛永十年前後を各方面で代表する人々を網羅しているとさえ思われる。それらの人々の動向や、この風雅と戯笑の送答の中に感得出来る寛永文化のいぶき

という見解もあり、この点からも「関屋」の書写者である玄陳は、寛永文化を担う重要な人物の一人であったといえる。

この『源氏物語』揃は、連歌師として『策伝和尚送答控』に名前が見える昌琢・玄仲・昌俔・玄陳・玄的・宗順が書写者の有力な構成員であった。そして、これら連歌師による書写は、宗祇以来の伝統である。言い換えれば、この『源氏物語』揃の書写は伝統的な形式を踏襲してなされたのである。そして書写された本文は、三条西家の証本の流れを汲む、当時としては、最も優良な本文であり、『源氏物語』諸本系譜の中では、中世の三条西家等の写本から、近世の『絵入 源氏物語』や北村季吟の『源氏物語湖月抄』等の版本への過渡期に位置する本であり、中世から江戸初期の『源氏物語』本文や源氏学を考える上で看過できない写本という位置づけが出来るのである。

翻刻凡例

- 一、翻刻に際しては、原本に忠実であることを旨として、仮名遣は原本通りとしたが、異体字・略体字は通行の字体に改めた。
- 一、和歌は改行をし、二字下げとした。
- 一、ミセケチは文字の中央に棒線を付し、訂正文字は右に記した。
- 一、本文の傍書は原本通りとした。
- 一、補入記号がある場合は該当箇所「」を付し、補入文字は右に記した。
- 一、漢字の踊字「〳」は、そのままとした。
- 一、本文の朱点は「・」で示した。
- 一、朱合点は、傍線で示した。
- 一、「手習」に錯簡がある。「須磨」39才〳84才は「手習」の本文であり、「手習」39才〳67ウが「須磨」の本文である。「手習」38ウの次に「須磨」39才〳84才にある「手習」の本文を置き、正しい本文として翻刻した。

(よもぎふ)

もしほたれつゝわひ給しころほひ都にも
さま／＼おほしなけく人おほかりしをさ
てもわか御身のより所あるはひとかたの
思ひこそくるしけなりしか二条のうへな
とものとやかにて旅の御すみかをもおほ
つかなからすきこえかよひ給つゝくらゐをさ
り給へるかりの御よそひをもたけのこの
よのうきふしをとき／＼につ／＼けてあつか
ひきこえ給になくさめ給けんなか／＼其か
すとも人にしられず立別給ひしほと御
ありさまをもよそのことに思ひやり給人々
のしたの心くたき給^たくひおほかり・ひたち
の宮の君はちゝみこのうせ給にしなこりに
又思ひあつかふ人もなき御身にていみし

1
才

う心ほそなりしを思ひかけぬ御ことの
いてきてとふらひきこえ給事たえさり
しをいかめしき御いきほひにこそことに
もあらすはかなきほと御なさけはかりと
おほしたりしほとまちうけたまふたもと
のせはきにはおほそらのほしのひかりをたら

1
ウ

いの水にうつしたるこし^こちしてすくし給ひ
しほとにかゝるよのさはき出きてなへての
世うくおほしみたれしまきれにわざとふかゝ
らぬかたの心さはうち忘たるやうにてと
をくおはしましにしのちふりはへてしもえ
たつねきこえ給はずその名こりにしは^はし
なく／＼もすくし給しを年月ふるまゝに
あはれにさひしき御ありさまなりふる
き女はらなとはいてやいとくちをしき御
すくせなりけりおほえす神仏のあら

2
オ

はれ給へらんやうなりし御心はえにかゝるよ
すかも人は おはするものなりけりとあり
かたうみたてまつりしをおほかたよのこと
といひながら又たのむかたなき御ありさま
こそかなしけれとつぶやきなくさるかた
にありつきたりしあなたのとしころは

いふかたなきさひしさにめなれてすくし
給しをなが／＼すこしよつきてならひにける
年月にいとたへかたく思ひなけくへしと
こしもさてありぬへき人々はをのつからま

いりつきてありしをみなつき／＼にしたかひ
ていきちりぬ女はらのいのちたへぬも有
て月日にしたかひて上下の人かす／＼く
くなりゆくもとよりあれたりし宮の
うちいと／＼きつねのすみかになりてう
とましうけとをきこたちにふくるつのこ
系を朝夕にみ／＼ならしつ／＼人けにこそさやう

2
ウ

のものもせゝれてかけかくしけれこたまな
とけしからぬものともところをえてやう／＼
かたちをあらはし物わひしきことのみかす

しらぬにまれ／＼のこりさふらふ人はなをい
とわりなしこの比すりやうなどのおもし
ろき家つくりこのむかこの宮のこたちを
心につけてはなちたまはせてんやとほ
とりにつきてあむなひまさするをさ

やうにせさせ給ていとかうものをそろし
からぬ御すまひにおほしうつろははなんだち
とまりさふらふ人もいとたへかたしなと
きこゆればあないみしや人のきゝ思はん
こともありいけるよにしかなこりなきわさ

はいかゝせんかくおそろしけにあればぬれ
とおやの御かけとまりたる心ちするふ
かきすみかと思ふになくさみてこそあれと

3
オ3
ウ

うちなきつゝおほしもかけず御でうとゝもゝ
いとこたひになれたるかむかしやうにてうる
はしきをなまものゝゆへしらむと思へる
人さるものえうしてわざとその人がの人に
せさせ給へるとたつねきゝてあんないするも
をのつかからかゝるまつしきあたりと思ひあな
つりていひくるをれいの女はらいかゝはせん

そこそはよのつねの事とてとりまぎら

はしつゝ目にちかきけふあすのみくるしさを

つくるはんとする時もあるをいみしういさ

め給て見よと思ひ給てこそしをかせ給

ひけめなとてかかるゝしき人の家のか

さりととはなさんなき人の御ほいたかはん

かあはれなることゝの給てさるわさはせさ

せ給はすはかなき事にてもとふらひきこ

ゆる人はなき御身なりたゝ御せうとのせん

しのきみはかりそまれゝに^も京に出給とき

4才

はさしのそき給へとなれ^そも世になきふる
めき人にておなしきほうしといふなかにも
たつきなくこの世をはなれたるひしりに
ものしたまひてしけき草よもきをたに
かきはらはん物とも思ひより給はす・かゝる
まゝにあさは庭のおももみえすしけり
よもきは軒をあらそひておひのほりむく
らは西ひんかしのみかとをとちこめたるそ
たのもしけれとくつれかちなるめくり
のかきを馬牛などのふみならしたる道にて

春夏のなれははなちかふあけまきの

心さへそめさましき八月野分あかりし

としらうとももたうれふししものや^うのはか

なきいたふきなりしなとはほねのみわつ

かに残りて立とまるけすたになしけふり

たえてあわれにいみしき事おほかりぬす人

なといふひたふるころあるものも思ひやりのさひしければにやこの宮をはぶよの物にふみすぎてよりこさりければ かくいみしきのらやふなれとも さすかにしんでんのうち

5ウ

はかりはありし御しつ いかはらすつやゝかにかひはきなとする人もなしちりはつもれともまきることなきつるはしき御すまひにもあかしくし給ふ・はかなきふるつた物かたりなとやうのすさひことにてこそつれ

つれをも思ひなくさむるわさなめれさやうのことにも御心をそく物し給わさとこのましかしねとをのつから又いそくことなき程はおなし心なる文かよはしなともうちしてこそわかき人は木草につけても心を

6オ

なくさめ給へけれとおやのもてかしつき給し御心おきてのまゝによの中をつゝまし

きものにおほしてまれにもことかよひ給へき御あたりをもさらになれたまはす・ふりにたるみつしあけてかしもりはこやのとしかくやひめの物がたりの氣にかきたるをそ時々まさりものにし給 ふるつたとてもおかしきやうにえりいてたいをもよみ人

をもあらはし心えたるこそ見どころ ありけれつるはしきかんやかしみちのくにかみ

6ウ

などのふくためるにふる事とものめなれたるなとはいと さましけなるをせめてなかめ給おりくはひきひろけ給いまの世の人のすめる経うちよみをこなひなといふ事はいとつかしうし給て見奉る人もなけれとすゝなととりよせ給はすかやうにうるはしくそのし給ける・侍従なといひし御めのとこのみこそとしころあくかれいてぬものにてさふらひつれとかよひまい

りしさい院うせ給なとしていとたへかた

7
才

く心ほそぎにこの姫君の母北のかたのはら
から世にをちふれてすりやうの北のかた
になり給へる有けりむすめともかしつき
てよろしきわか人とも ^もむけにしらぬところよ

り半^はおやともまうてかよひしをと思ひ

てときくいきかよふこの姫君はかく人う

とき御くせなれはむつましくもいひかよひ

給はすをのれをはおとしめ給ておもてふせ

におほしたりしかは姫君の御ありさまの

心くるしけなるもえとふらひきこえずなと

7
ウ

なまにくけなることはともいひきかせつゝと

きくきこえけり・もとより有つきたる

さやうのなみくの人は中くよき人のまね

に心をつくるひ思ひあかるもおほかるをや

むことなきすぢなからもかうまでおつへき

すくせありければにや心すこしなをくし

き御^おをはにそありける・わかかくおとりの

さまにてあなつらはしく思はれたりしをいか

てかかゝる世の末にこの君を我かむすめとも

のつかひ人になしてしかな心はせなとのふるひ

8
才

たるかたこそあれいとうしろやすきうしろ

みならむと思ひて時々こゝにわたらせ給て

御ことのねもつけたまはらまほしかる人なむ

侍ときこえけりこの侍従もつねにいひ

もよほせと人にいとむ心には ^{あた}たこちたき

御ものつゝみなれはさもむつひ給はぬをねた

しとなん思ける・かゝるほとにかの家あるし

大式になりぬなりぬむすめともあるへき

さまにみをきてくたりなんとすこの君を

なをもいさなはんの心ふかくてはるかにかく

まかりなんとするに心ほそき御ありさま

8
ウ

のつねにしもとふらひきこえねとちかきた
 のみ侍つるほとこそあれいと哀につしる
 めたくなんなどことよかるをさらにうけひ
 き給はねはあなにくこと／＼しや心ひとつに
 おほしあかるともさるやふはらにとしへ給
 へる人を大將殿もやんことなくしも思き
 こえ給はしなとえんしうけひけりさるほと
 にけに世中にゆるされ給て宮こに帰り
 給とあめのしたのよろこひにてたちさはく

我もいかて人よりさきにふかき心さしを御
 らんせられんとのみ思ひきほふおとこ女に
 つけてたかきをもくたれるをも人の心は
 へを見たまふにあはれに^{おほし}しる事さま／＼な
 りかやうにあはた／＼しき程にさらに思ひい
 て給ふけしきみえて月日へぬいまは^かきり
 なりけり年比あらぬさまなる御ありさま
 をかなしういみしきことを思ひなからもえ

9
才

出る春にあひ給はなんとねんしわたり
 つれとたひしかはらなとまてよろこひ思ひ

なる御くらゐあらたまりなとするをよそ
 にのみきく^へつきなりけりかなしかりしおり
 のうれはしさはた／＼我身ひとつのためになれ
 るとおほえしかひなきよかなと心くたけてつ
 らくかなしければ人しれすねをのみなき給
 ふ・大弐の北のかたされはよまさにかくたつ
 きなく人わるき御ありさまをかすまへ給人
 はありなんや仏ひしりもつみかろきをこ
 そ道引よくし給なれかゝる御ありさまにて
 たけくよをおほし宮うへなどのを^おはせし
 時のま／＼にならひ給つる御心^おをこりのい
 とをしき事といと／＼おこがましけに思ひ
 てなをおもほしたちねよのつきときはみ
 えぬ山ちをこそ^はたつぬなれあ中なとは

9
ウ10
才

むつかしきものとおほしやるらめとひたふる
 に入わるけにはよももてなしきこえしなと
 いとことよくいへはむけにくつしたる女
 はらさまなひき給はなんとけき事もある
 ましき御身をいかにおほしてかくたてたる
 御心ならんともときつふやく侍従もかの太

式のおひたつ人かたらひつきてとゝむへく
 もあらさりければ心よりほかに出たちて見た
 てまつりをかんかいと心くるしきをとて
 そゝのかしきこゆれとなをかくかけはなれ
 てひさしうなり給ぬる人にたのみをかけ
 給御心のうちにさりととも有へてもおほし
 いつるついであらしやは哀に心ふりき契を
 し給しに我身のうくてかくわすられたる
 にこそあれ風のつてにてもわかかきいみ
 しき有さまをきゝつけ給はゝかならずと

10
ウ11
オ

むらひいて給てむととしころおほしければお
 ほかたの御いゑるもありしよりけにあさ
 ましけれとわか心もてはかなき御てう
 とゝもなともとりうしなはせ給はす心つ
 よくおなしさまにてねんしこし給なり
 けり程わなきかちにいとゝおほししつみた
 るにたゝ山人のあかきこのみひとつをか
 ほにはなたぬとみえ給御そはめなとはおほ
 るけの人の見たてまつりゆるすへきに
 もあらずかしくはしくはきこえしいとをしう

ものいひさかなきやうなり冬に成行ま
 まにいとゝかきつかんかたなくかなしけに
 なかめすくし給ふかの殿にはこ院の御れつ
 の御八講よの中ゆすりてし給ことに
 そうなとはなへてのはめさすさえずかくれ
 をおこなひにしみたうときかきりをえらせ給
 ければこのせんしの君もまいり給へりけり

11
ウ

かへりさまに立より給てしかく権大納言
との御はつかうにまいり侍るなりいと
かしこしいけるしやうとのかさりにをとらす

いかめしうおもしろきことゝものかきりをな
むし給へさる仏菩薩の変化の身に

こそ物し給めれいつゝのにこりふかき世に
なとてむまれ給ひけんといひてやかてい

て給ぬことすくなによの人によぬ御あはひ
にてかひなきよの物かたりをたにえきこ

えあはせ給はすさてもかはかりつたなき
身のありさまをあはれにおほつかなく

てすくし給は心その仏ほさつやとつらう
おほゆけにかきりなめりとやうく思ひ

なり給に大式の北のかたにはかにきたり

れいはさしもむつひぬをさそひたてんの
心にてたてまつるへき御さうそくなとて

12
ウ12
オ

くしてよきくるまにのりておもゝちけ色
ほこりかに物思ひなけなるさましてゆく
りもなくはしりきて門あくるより人わろ
くさひしき事がきりもなしひたりみき
のともみなよろほひたうれにければをの
こともたすけてかくあけさはくいづれ
かこのさひしきやとにもかならずわけたる

あとあなるみつの道とたとるわつかに
みなみおりてのかうしあけたるまに
よせたれはいとゝはしたなしとおほした
れとあさましうけたる木丁さしいてゝ
しゝういて来りかたちなとおとろへに
けりとしころいたうつゑえたれとなを
ものきよけによしあるさましてかたしけ
なくともとりかへつへく見ゆいてたち
なんことを思ひなかし心くるしき御ありさま
のみすてたてまつりかたきをしゝう

13
オ

のむかへになんまいり来る心つくおほしへた
 てゝ御身つからこそあからさまにもわたらせ給
 はねこの人をたにゆるさせ給へとてなん
 なとかうあはれけるさまにはとてうち
 もなくへきそかしされとゆく道に心をや
 りていと心ちよけなり・こ宮おはせし時
 をのれをはおもてふせなりとおほしすて
 たりしかはうとくしきやうになりそめに
 しかと年ころもなにかはやむことなきさま
 におほしあかり大將殿なとおはしましかよふ
 御すくせのほとをかたしけなく思給へられ
 しかはなんむつひきこえせんもはゝかる
 事おほくてすくしはへりつるをよの中の
 かくさためもなかりければかす^ならぬは身は中く
 心やすく侍ものなりけりをよひなくみた
 てまつりし御有さまのいとかなしく心

13
ウ14
オ

くるしきをちかきほとはをのつからおこたる
 おりものとかにたのもしくなんはへりける
 をかくはるかにまかりなんとすればうしろめた
 く哀におほえたまふなとかたらへと心と
 けてもいらへ給はすいとうれしきことなれ
 とよにゝぬさまにて何かはかうなからこそ
 くちもうせめとなん思侍とのみの給へは
 けにしかなむおほさるへけれといける
 身を捨てかくむくつけきすまひする
 たくひは侍らすやあらん大將殿のつくり
 みかゑ給はん^きにこそはひきかへたまのうて
 なにもなりかへらめとはたのもしう^は侍れ
 とたゝ今は兵部卿の宮の御むすめより
 ほかに心わけ給かたもなかなり昔よりすき
 すきしき御心にてなをさりにかよひ給
 ける所くみなおほしはなれにたなりまし

14
ウ15
オ

てかうものはかなきさまにてやふはらに
 すすし給へる人をはいきよく我をたのみ
 給へる有さまと尋きこえ給こといとかた
 くなんあるへきなといひしらするをけに
 とおほすもいとかなくしてつくくとな
 き給されとうこくへうもあらねは万にい
 ひわつらひくらしでさらはしうをたにと
 日のくるゝまゝにいそけは心あはたゝしく
 てなくくさらはまつけふはかうせめ給
 をくりはかりにまつて侍らんかのきこえ
 給もことはりなり又おほしわつらふもさる
 事に侍れは中に見たまふるも心くるしく
 なんとしのひてきこゆこの人さへうちす
 てゝんとするをうらめしうも哀にもおほ
 せといひとゝむへきかたもなくていとゝねを
 のみたけき事にてものし給かたみにそ
 へ給へき身なれころもゝしほなれたれば

15
ウ

年経ぬるしるしみせ給へきものなくて
 我御くしのおちたりけるをとりあつめ
 てかつらにし給へるか九尺よはかりにてい
 ときよらなるをおかしけなるはこにいれ
 てむかしの人のえかうのいとかうはし
 きひとつほくしてたまふ
 たゆましきすちをたのみし玉かつら
 思ひのほかにかかはなれぬるこまゝの
 のたまひをきし事もありしかはかひな
 きみなりとも見はてゝんとこそ思ひつれ
 打捨らるゝもことはりなれとたれにみゆつ
 つりてかとうらめしうなるといみし
 うない給この人も物もきこえやらすまゝ
 のゆいこむはさらにもきこえさせすとし
 比のしのひかたきよのうさをすくし侍り
 つるにかくおほえぬみちにいさなはれて

16
ウ16
オ

はるかにまかりあくかるゝことゝて

玉かつらたえてもやまし行道も手向の

袖もかけてちはん命こそしり侍らねな

といふにいつくらふなりぬとつふやは

れて心も空にてひきいづればかへりみ

のみなんせられける年比わひつゝもゆき

はなれさりつる人のかくわかれぬることを

いと心ほそうおほすによにもちぬる

ましきおひ人さへいてや事はりそいかて

かたちとまり給はん我らもえこそねんしは

つましけれとをのかみゝにつけたるたより

とも思ひいてゝとまるましう思へるを入

わるくきゝおはすしもつきはかりになれは

雪あられかちにてほかにはきゆるまも有

を朝日夕日をふせくよもきむくらのかけに

ふかつつもりてこしのしら山思ひやらるゝ

17
才

17
ウ

雪のうちに出来るしも人たになくてつれ

つれとなかめ給はゝなきことをきこえな

くさめなきみわらひみまきはしつる人

さへなくてよるもちりかましきみ丁のう

ちもかたはらまひしく物かなしくおほさる・

かのとにはめつらし人にいとゝ物さは

かしき御有さまにていとやむことなくお

ほされぬところゝにはわさともえをと

つれたまはすましてその人はよにやはす

らんとばかりおほしいつるおりもあれとた

つね給へき御心さしもいそかてありふ

るにとしかはりぬうつきはかりにはなちる

里を思ひいてきこえ給て忍てたい

のうへに御いとまきこえていて給日ころふ

りつるなこりの雨すこしそゝきておかし

きほとに月さし出たりむかしの御ありき

おほしいてられてえんなるほどのゆふつく

よにみちのほとよろつ事おほし出て
おはするにかたもなくあれたる家のこ

たちしけくもりのやうなるをすき給

おほきなる松にふちのさきかゝりて月
影になよひたる風につきてさとにほふ

かなつかしくそこはかとなきかほりなり

たち花にはかはりてをかしければさしいて給へる

に柳もいたうしたりてついちもさはらねはみたれ

ふしたり見し心ちするこたちかなとおほすは

はやうこの宮なりけりいとあはれにてをし

とゝめさせ給れいのこれみつはかゝる御しのひあ

りきにをくれねはさぶらひけりめしよせてこゝ

19
才

はひたちの宮そかしなしか侍りとぎこゆこゝ

にありし人はまたやなかむらんとふらふへきを

わさとのせんもところせしかくるついでに

いりてせうそこせよ能たつねよりてをう

18
ウ

ちいてよ人たかへしてはをこならんとの給ふこゝ

にはいとゝなめまさるころにてつくゝとおか^はし

けるにひるねの夢に古宮のみえ給ければ

さめていと名残がなしくおほしてもりぬれ

たるひさしのはしつかたをしのこはせてこゝかし

このおましひきつくろはせなとしつゝれいな

らすよつき給て

なき人をこふるたもとのひまなきにあれ

たる軒のしつくさへそふも心くるしきほとに

なん有けるこれみついでめくるゝ人をと

するかたやあると見るにいさゝか入けもせず

されはこそ^世行来の道に見いるれと人すみけ

もなき物と思ひてかへりまいるほどに月

あかくさし出たるに見ればかうしふたまはかり

あな^こけてすたれうこく気色なりわつかに見つ

けたるこゝちおそろしくさへおほゆれとよりて

19
ウ

20
才

こはつくれはいと物ふりたる声にてまつし
 はぶきをさきにたてゝかれはたれそ何人そ
 ととふなのりして侍従の君ときこえしに人に
 たいめん給はらんといふそれはほかになんものし給
 されとおほしわくましき女なはんはへるといふこゑ
 いたふねひすきたれときゝしをひ人と聞し
 りたりうちには思ひもよらずかりきぬすかた
 なるおとこの忍ひやかにもてなしてなこやか
 なれは見ならはす也にけるめにてもしきつね
 などのへんけにやとおほゆれとちかうより
 てたしかなんうけ給はらまほしきかはらぬ御
 有さまならは尋きこえさせ給へき御心さしもた
 たえすなんおはしますめるこよひも行すきかてに
 とまらせ給へるをいかゝきこえさせんうしろやすく
 をといへは女ともうちわらひてかはらせ給御有さま
 ならはかゝるあさちかはらをつつろひ給はては
 侍なんやたゝをしはかりてきこえさせ給へかし年

へたる人の心にもたくひあらしとのみめつらかなる
 よをこそはみたてまつりすぐし侍れとやゝくつ
 しいてゝとはすかたりもしつへきかむつかしけ
 れはよしゝまつかくきこえさせんとてまいり
 ぬなとかいとひさしかりつるいかにそむかしの
 跡もみえぬにもきのしけさかなとの給へはしか
 〳〵 なたとりよりて侍つる侍従かをほの
 少将といひ侍しをひ人ななかはらぬこゑにて侍り
 つると有さまきこゆいみしうあはれにかゝるしけ
 き中になに心ちしてすゝし給らんいまゝてとは
 さりけるよと我御心のなさけなまもおほし
 しらるいかゝすへきかゝる忍ひありきもかたか
 るへきをかゝるつゐてならては立よらしかはら
 ぬ有さまならはけにさこそはあらめとをしは
 かしらるゝ人さまになんとはのたまひなからふといり
 給はん事をつゝましくおほさるゆへある御せう

そこもいときこえまほしけれと見給し程のく
ちをそさもまたかはらすは御つかひのたちわ
つらはんもいとをしうおほしとゝめつこれみつ
もさらにえわけさせ給ましきよもきの露
けさになん侍露すこしはらはせてなんいらせ
給へきときこゆれは

尋ても我こそとよめ道もなくふかき

よもきのもとの心をとひとりこちてなをおり
給へはみさきの露を馬のむちしてはらひつゝ
いれたてまつるあまそゝきもなを秋のしく
れめきてうちそゝけは御かささふらふけにこの
した露は雨にまさりてときこゆ御さしぬきの
すそはいたうそほちぬめりむかしたにあるか
なきかなりし中門なとましてかたもなくなり
ていり給につけてもいとむとくなるをたち
ましり見る人なきそ心やすかりける・姫君は
さりともとまちすくし給へる心もしるくうれし

22
才

けれといとはつかしき御有さまにてたいめんせ
むもいとつゝましくおほしたり大貳の北のかた
てまつりをきし御そともをも心ゆかすおほされ
しゆかりに見いれ給はさりけるをこの人々の
かうの御からひつに入たりけるかいとなつかしき
かしたるをたてまつりければいかゝはせんにきか
へ給てかのすゝけたる御き丁引よせておはす
いり給て・としころのへたてにも心はかりはかはら
すなん思ひやりきこえつるをさしもおとろ
かい給はぬうらめしさにいまゝて心みきこえつる
をすきならぬこたちのしるきにえすきてなんまけ
きこえにけるとてかたひらをすこしかきやり
給へれはれいのいとつゝましけにとみにもい
らへきこえたまはすかくはかり分入給つるかあさ
からぬに思をこしてそほのかにきこえ出給ける
かゝる草かくれにすくし給ける年月のあはれ

22
ウ23
才

もをろかならずまたかはらぬ心ならひに人の御心の
うちもととりしらすなからわけ入侍りつる露
けさなとをいかゝおほすとしころのをこたり
はたなへてのよにおほしゆるすらにいまより

23
ウ

後の御心にしかなはさらなんいひしにたかぶつ
みもおふへきなとさしもおほされぬ事も情な
さけしうきこえなし給事共もおむめり立
とゝまり給はんも所のさまよりはしめまはゆき
御有さまなればつき／＼しくの給ひすへして出給
なんとすひきうへしならねと松のこ高くなり
ける年月の程もあはれに夢のやうなる御身
の有さまもおほしつゝける

藤なみのうちすきかたく見えつるは松こそ
やとのしるしなりけれかそふればこよなつつも

24
オ

りぬらんかし宮こにかはりにけることのおほかりけ
るもさま／＼哀になん今のとかにそひなのわ

かれにおとろへしよの物かたりもきこえつくすへ
き又とし経給ひつらん春秋のくらしかたさなと
も誰にかはうれへ給はんとうらもなくおほゆるも
かつはあやしうななときこえ給へは

年をへてまつしるしなきわかやとを花の
たよりに過ぬはかりかとしのひやかにうちみしろ
き給へるけはひも袖のかもむかしよりはねひま
さり給へるにやとおほさる月いりかたになりて

24
ウ

にしのつまとのあきたるよりさはるへきわたとの
たつ屋もなく軒のつまものこりなければいと
はなやかにさしいりたればあたり／＼みゆるにむかし
にかはらぬ御しつらひのさまなとしのふ草にや
つれたるうへの見るめよりはみやよひかにみゆる
をむかしものかたりに塔こほちたる人のあり
けるをおほしあはするにおなしさまにてと
しふりにけるも哀なりひたふるにものつゝみ
したるけはひのさすかにあてやかなるも心に

くゝおほされてさるかたにて忘しと心くるしく

思ひしをとしころさま／＼のものおもひにほれ／＼

しくてへたてつるほとつらしとおもはれつらん

といとをしくおほす・かの花ちる里もあさやかに

今めかしうなとははなやき給はぬ所にて御め

うつしこよなからぬにとかおほうかくれにけりま

つりこけいなとのほと御いそきとものにことつけ

て人のたてまつりたるもの色々におほかる

をさるへきかきり御心くはへ給なかにもこの宮

にはこまやかにおほしよりてむつまじき人々に

おほせことたまひしもへともなとつかはして

よもきはらはせめくりの見るるしきにいたか

きといふものうちかためつくるはせ給かうたつ

ね出給へりときゝつたへんにつけても我御

ため むほくなければわたり給事はなし御文

いとこまやかにかき給て二条院いとちかき

25
才25
ウ

ところをつくらせ給をそこになんわたくしたて

まつるへきよろしきわらはへなともとめさふらは

せ給へなと人のうへまでおほしやりつゝとふらひ

きこえ給へはかくあやしきよもきのもとにはをき

ところなきまで女はらもそらをあふきてなん

そなたにむきてよろこひきこえける・なけの御

すさ^みひにてもをしなへたるよのつねの人をは

めとゝめみゝたて給はずよにすこしこれはと

おもほえ心ちにとまるふしあるあたりをたつ

ねより給ものと人のしりたるにかくひき^たかへ

なにこともなのめにたにあらぬ御有さまをも^ち

のめかしいて給ふはいかなりける御心にか

有けんこれもむかしのちきりなめりかし・今

はかきりとあなつりはてゝさま／＼にきほひ

ちりあかれしうへしもの人々我も／＼まいらむ

とあらそひいつる人も有こゝろはへなとはた

26
才26
ウ

むもれいたき^ままでよくおはする御有さま

に心やすくならひてことなることなきなます

りやうなとやうのいへにある人はならはす

はしたなきこゝちするもありてうちつつけの

心みえにまいりかへるきみはいにし^へに、にもまさ

りたる御いきほひのほとにて物の思ひや

りもましてそひ給ひにければこまやかにお

ほしをき^て たるにゝほひいてて宮のうちやつ／＼

人目見え本草の葉もたゝすこく哀にみえ

なされしをやり水かきはらひせんさいのもとた

ちもすゝしうしなしなとしてことなるおほえ

なきしもけいしのことにつかまつらまほしきは^{うす}

かく御心とゝめておほさる^ゑ 事なめりとみとり

て御けしき給はりつゝつゐせうしつかうまつ

るふたとせはかりこのふる宮になかめ給てひん

かしの院といふところになん後はわたしたてま

つり給けるたいめんし給ことなとはいとかた

27
才

けれとちかきしめの程にておほかたにも

わたり給にさしのそきなとし給つゝいとあな

つらはしけにもてなしきこえ給はすかの太

貳の北の方のほりておとろきおもへるさま

しゝうかうれしきものゝ今しはしまちきこえ

さりけるも心あさゝをはつかしう思へるほと

なとを今すこしとはすかたりもせま^は しけれ

といとかしらいたく^ううるさく物つけは今ま

たもき^ついてあらんおりに思ひいてゝなん

きこゆへきとそ

28
才

27
ウ

(せき屋)

伊よのすけといひしはこ院かくれさせ給て又の
年ひたちになりてくたりしかはかのはゝきゝも
いさなはれにけりすまの御旅あもはるかにきゝ
て人しれすおもひやりきこえぬにしもあらざり
しかとつたへきこゆへきよすかたにかくてつくは

ねの山をふきこす風もうきたる心ちしていさ
さかのつたへたになくて年月かさなりにけりか
きれる事もなかりし御たひみなれと京にかへ
りすみ給て又のとしのあきそひたちはのほり
けるせきいる日しもこの殿いし山に御願はた

しにまうて給ふけり京よりの紀伊守など

いひしこともむかへにきたる人くこのとのかくま
うて給へしとつけければみちのほとさはかしかり
なむ物そとてまたあかつきよりいそぎけるを女

1才

くるまおほく所せうゆるきくるに日たけぬうち
いてのはまくるほどに殿はあはた山こえ給ぬとて御
せむの人くみちもさりあへすきこみぬればせき
にみなおりゐてくかしこのすきのしたに車と
もかきおろし木かくれにゐかしこまりてすぐし
たてまつくるまなとかたへはをくらかしさに

たてなとしたれとなをるひろくみゆるまとを
はかりそ袖くち物の色あひなとももりいてみえ
たるゐ中ひすよしありて齋宮の御くたりなにそ

やつの物見くるまおほしいてらる・殿もかくよにさか
へいて給めつらしさにかすもなき御せむともみな
めとゝめたり・九月つこもりなれば紅葉の色く

こきませ霜かれの草むらくおかしうみえわたるに
閑屋よりさとはつれいてたるたひすかたとのいろ
いろのあをのつきくしきぬ物くりそめのさま
もさるかたにおかしうみゆ御くるまはすたれおろし

1ウ

2オ

給てかのむかしのこきみ右衛門のすけなるをめ
しよせてけふの御せきむかへはえおもひすて
給はしなどのたまふ御心のうちいとあはれにおほし
いつる事おほかれとおほそふにてかひなし女も
人しれすむかしの事わすれねはとりかへして物
あはれなり

ゆくときとせきとめかたきなみたをやたえぬ
し水と人は見るらむえしり給はしかしとおもふ
にいとかひなし・いし山よりいて給御むかへに右ゑもん
のすけまいれり一日まかりすきしかしこまりなと申

2ウ

むかしわらはにていとむつまじうらうたきものに
したまひしかはかうぶりなとえしまてこの御とく
にかくれたりしをおほえぬ世のさはきありしこ
ろものゝきこえにはゝかりてひたちにくたりしを
そすこし御心をきてとしころはおほしけれと色
にもいたし給はすむかしのやうにこそあらねとな
をしたしきい糸人のうちにはかそへ給けり・きの

かみといひしもいまはかうちのかみにそなりにける
そのおとつとの右近の世^そうとけて御ともにくた
りしをそとりわきてなしいて給ければそれにそ

3オ

たれもおもひしりてなとてすこしも世にした
かふ心をつかひけむ^なとおもひいてけるすけめしよせ
て御せうそこありいまはおほしわすれぬへき事
を心なくもおはするかなとおもひあたり一日は
ちきりしられしをさはおほししりけむや

わくらはにゆきあふみちをたのみしもなを

かひなしやしほならぬうみせきもりのさもつら
やましくめさましかりしかなとあり・としころのと
たえもつひくしくなりにけれと心にはいつとなく
たゝいまのこゝちするならひになむすきくしう

3ウ

いとゝにくまれむやとて給へれはかたしけなくても
ていきてなをきこえたまへむかしにはすこしおほ
しのく事あらむとおもひ給ふるにおなしやう

なる御心のなつかしきなむいとありかたきすさひ
 ことそよなき事とおもへとこそすくよかに
 きこえかへさね女にてはまけきこえ給へらむにつみ
 ゆるされぬへしなといふいまはましていとつかしう
 よろつの事うひくしきこちすれとめつらしき
 にやえしのはさりけむ

あぶさかのせきやいかなるせきなれはしけき

4
才

なけきの中をわくらむゆめのやうになむときこ
 えたりあはれもつらさもわすれぬふしとおほし
 をかれたる人なれはおりくはなをのたまひう
 こかしけりかゝるほどにこのひたちのかみおいのつ
 もりにやなやましくのみして物心ほそかりけれ
 はこともたこの君の御事をのみいひをき
 てよろつの事この御心にのみまかせてあり
 つるよにかはらてつかうまつれとのみあけくれ
 いひけり女君心うきすぐせありてこの人にさへ
 をくれていかなるさまにはふれまどふへきにかあ

4
ウ

らむとおもひなけき給を見るにいのちのかきり
 あるものなれはおしみとむきかたもなしいかて
 かこの人の御ためにのこしをく玉しぬもかなわかこ
 ともの心もしらぬをとうしろめたうかなしきこ
 とにいひおもへと心にえとめぬ物にてうせぬし
 はしこそさのたまひし物をとなさけつくれと
 うはへこそあれつらき事おほかりとあるもかゝる
 も世のことはりなれは身ひとつのうき事にてなけ
 きあかしくらすたこのかうちのかみのみそむかし
 よりすき心ありてすこしなさけかりけるあはれにの

5
才

たまひをきしをかすならずともおほしうとまで
 のたまはせよなとついそつしよりていとあさまし
 き心のみえければうきすぐせある身にてかくいき
 とまりてはてはめつらしき事ともをき
 そふるかなと人しれすおもひしりて人にさな
 むともしらせてあまになりけりある人く

いふかひなしと思ひなけくかみもいとつらうをの
れをいとひ給ほとにのこりの御よはひはおほく
物し給ふらむいかてかすこし給へきなとそあいな
のさかしらやなとそ侍める

(てならひ)

その比よ川になにかし僧都とかいひていと
たうとき人すみけり八十あまりの母五十
はかりのいもうとありけりふるき願ありて
はつせにまうてたりけり・むつましくやむ
ことなく思ふてしのあさりをそへて仏経
くやうすることおこなひけりことゝもおほ
くしてかへる道になら坂といふ山こえ
けるほどより此あま君こゝちあしくしけ
れはかくてはいかてかのこりのみちをもお
はしつかんともてさはきて宇治のわたり

1
才

きりのさまなるおやのみちの空にてな

くやならむとおとろきていそき物したまへ
りおしむへくもあらぬ人のさまをみつからも
弟子の中にもけんあるしてかちしさくを
いゑあるしきゝてみたけさうしゝ侍をいた
くおいたまへる人のをもくなやみ給ふはい
かゝとつしるめたけにおもひていひければ
さもいふへきことゝいとをしく思ていとせ
はくむつましくもあればやうゝゝゝゝゝゝゝゝ
まつるへきになかゝみふたかりてれいすみ給
ふ所はいむへかりけるを故朱雀院の御りや
うにて宇治。院といひし所のわたりならん
とおもひ出てゐんもり僧都しりたまへり
ければ一二日やとらんといいひにやり給へりけ
れははつせになんきのふみなまつてにける
とていとあやしきやとまりのおきなをよひ

1
ウ2
才

てゐてきたりおはしまさはゝやいたつらなる
 院のしんでんにこそ侍るめれ物まつての人
 はつねにそやとり給ふといへはいとよかむな
 りおほやけ所なれと人もなく心やすきと
 とて見せにやり給ふこのおきなれいもかく
 やとる人を 見ならひたりければおろそかなる
 しつらひなとしてきたりまつ僧都わたり給
 いといたくあれておそろしけなる所かなと
 見給ひてたいとこたち経よめなどの給・
 このはつせにそひたりしあさりとおなじや

うなる 今ひとり 無なに事のあるにかつきゝ
 しきほととのけらうほうしに火ともさせて
 人もよらぬうしろのかたにいきたりもり
 かと見ゆる木のしたをうとましけのわた
 りやとみいたるにしろきものゝひろこり
 たるそ見ゆるかれはなにそと立とまりて
 火をあかくなして見れば物のあたるすかた

2ウ

なりきつねのへんくゑしたるにくしみ
 あらはさむとてひとりはいますこしあゆみ
 よるいまひとりはあなようなよからぬ物ならん

といひてさやうの物しそくへきいんをつくり
 つゝさすかになをまもるかしろのかみあらはふと
 りぬへき心ちするに此火ともしたるたいと
 こはゝかりもなくあふなきさまにてちかくより
 てそのさまをみればかみのはなかくつやゝと
 しておほきなる 本のきつねのいとあらゝしき
 によりゐていみしくなくめつらしきことにも
 侍る哉と僧都の御坊に御らんせさせたて

まつらはやといへはけにあやしきことなりとて
 ひとりはまつてゝかゝることなるとまつすきつ
 ねの人にへんくゑするとはむかしよりきけと
 またみぬ物なりとてわさとおりておはすかの
 わたり給はんとすることによりてけすともは

3ウ

3オ

みなはかゝしきはみへし所なとあるへかしきこと
 とををかゝるわたりにはいそく物なりければあ
 しつまりなとしたるにたゞ四五人してこ
 こなる物を見るにかはることもなしあやし
 くて時のうつるまでみるとく夜も明はて
 なんんかかなにそと見あらはさんと心にさる
 へき真言をよみいむをつくりて心みるにし

るくやおもふらんこれは人なりさらにひさつ
 けしからぬ物にあらすよりとへなくなり
 たる人にはあらぬにこそあめれもししにたる
 人をすてたりけるかよみかへりたるかと
 いふなにのさる人をかこの院のうちにすて侍
 らんたとひまことに人なりともきつねこた
 まやうの物のあさむきてとりもてきたらん
 にこそ侍らめいとふひんにも侍けるかなけ
 からひあるへき所にこそ侍めれといひてあり
 つるやとりのをのこをよふ山ひこのこたふ

4
才

るもいとおそろしあやしのさまにひたいをし
 あけていて来たりこゝにはわかき女なとやす
 み給かゝることなんあるとてみすればきつ
 ねのつかまつるなりこの木のもとになん
 きくあやしきわさし侍ををとゝしの秋も
 こゝに侍る人のふたつばかりにはへりしをとり
 てまつてきたりしかともみおとろかす侍る
 まきつねはさこそ人はをひやかせとことに
 もあらぬやつといふさまいとなれたりかの夜
 ふかきまいりものゝ所に心をよせたるなるへし・

僧都さらはさやうの物のしたるわさか猶よく
 みよとて此物をちせぬほつしをよせたれば
 鬼か神かきつねかこたまかかはかりの天の
 したのけんさのおはしますにはえかくれたて
 まつらし名のりたまへくときぬをとりて
 ひけはかほを引いていよくなくいてあな

4
ウ5
才

さかなのこたまのおにやまさにかくれなん
 やといひつゝかほをみんとするにむかしあり
 けんめもはなもなかりけんめおにゝやあら
 むとむくつけきをたのもしくいかきさま

5
ウ

を人に見せんとおもひてきぬをひきぬか
 せんとすれはうつふして声たつばかりなく
 なにゝまれかくあやしきこと世にあらしとて
 見はてんと思に雨いたくふりぬへしかくてを
 いたらはしにはて侍りぬへしかきのもとに
 こそいたさめといふ僧都まことの人のかた
 ちなりその命たえぬを見るゝすてんこと
 いみしきことなりいけにをよくいを山にな
 くしかをたに人にとらへられてしなんとする
 を見つゝたすけさらむはいとかなしかるへし

6
オ

人のいのちひさしかるましきものなれとのこ
 りの命一二日をもおしますはあるへからすおに

にも神にもりやうせられ人におはれ人に
 はかり^こたれてもこれよこさまのしにをす
 へき物にこそはあめれ仏のかならずゝくひ
 たまふへききはなり猶心みにしはしゆを
 のませなとしてたすけ心みんつゐにしぬ
 へくはいふかきりにあらずとのたまふてこの
 たいとこしていたきいれ^{きせ}す給ふてしと
 たいゝしきわさかないたくわつらひ給人

6
ウ

の御あたりによからぬ物をとりいれ^てすけから
 ひかならず出きなんとすともくもあり又
 ものゝへんく系にもあれめにみすゝいける
 人をかゝるあめにうちうしなはせむはいみし
 きことなれはなんと心こゝろにいふけすなどは
 いとさはかしく物をうたていひなす物なれば
 人さはかしからぬかくれのかたになんふせたり
 ける・御車よせており給ふほいたくくるし
 かり給ふとてのゝしるすこししつまりて僧

都ありつる人はいかゝなりぬるとゝひたまふ

なよ／＼として物もいはずいきもし侍らす何か
物にけとられにける人にこそといふをいもつ

とのあま君きゝ給ひてなに事そとゝふ

しか／＼のことをなん六十にあまるとしめつら

かなる物をみたまへつるとの給ふうちきく

まゝにをのかてらにてみしゆめありきいかや

うなる人そまつそのさまみんとなきてのた

まふたゝこのひんかしのやり戸になむ傳はく

るはや御らんせよといへはいそきいきてみる

に人もよりつかてそ捨をきたりけるいと

7
ウ

わか／＼つくしけなる女のしろきあやのきぬ

ひとかさねくれなゐのはかまそきたるかは

いみしくかうはしくてあてなるけはひかきり

なしたゝわかこひかなしむむすめのかへりおは

したるなめりとてなく／＼こまたちをいたして

7
オ

いたきいれさすいかなりつらんともありさま

みぬ人はをそろしからていたきいれつゝ

けるやうにもあらてさすかに目をほのかに

見あげたるに物のたまへやいかなる人が

かくては物したまへるといへと物おほえぬ

8
オ

さやまなりゆとりてゝつからすくひいれなとする

にたゝよはりにたえ入やうなりければ

なか／＼いみしきわさかなとて此人なくなり

ぬへしかちしたまへとけんさのあさりにいふ

されはこそあやしき御物あつかひなりとは

いへとかみなとの御ために経よみつゝい

のるそうつもさしのそきていかにそなに

のしわさそとよくてうしてとへとのたま

へとよこはけにきえもていくやうなればえい

き侍らしすゝるなるけからひにこもりてわつ

8
ウ

らふへきことさすかにいとやむことなき

人にこそ侍めれしにはつともたゞにやは
 すてさせたまはん見くるしきわさかなとい
 ひあへりあなかま人にきかすなわつらはしき
 こともそあるなと口かためつゝあま君は
 おやのわつらひたまふよりもこの人をいけ
 はてゝみまほしくおしみてうちつけにそひあ
 たりしらぬ人なれとみめのこよなくおかし
 ければいたつらになさしと見るかきりあつ
 かひさはきけりさすかに時々め見あけなとし
 つゝなみたのつきせすなかるゝをあな心つ
 やいみしくかなしとおもふ人のかはりに仏
 の道ひきたまへると思ひきこゆるをか
 ひなくなり給はゝ中／＼なることをやおも
 はんさるへきちきりにてこそかく見たてま
 つらめ猶いさゝか物のたまへといひつゝくれ
 とからうしていき出たりともあやしきふよ
 うの人なり人に見せてよるこの河におと

9
才

し入たまひてよといきのしたにいふまれ／＼
 物のたまふをうれしとおもふにあないみしやい
 かなればかく^はのたまふそいかにしてさる所には
 おはしつるそとへとも物もいはすなりぬ身
 にもしきすなとやあらんとてみれとこゝはと
 みゆる所なくうつくしければあさましくか
 なしくまことに人の心まとはさんとして出き
 たるかりの物にやとうたかふ・二日はかりこ
 もりあてふたりの人をいのりかちする
 声たえすあやしきことをおもひさはくそのわ
 たりのけすなとのそうつにつかまつりける
 かくておはしますなりとてとぶらひ出くるも
 物かたりなとしていふをきけは故い^ハの宮の御
 むすめ右大将とのゝかよひ給しことになや
 みたまふこともなくてにはかにかくれたまへ
 りとてさはき侍その御さつそうのさう

9
ウ10
才

しもつかふまつり侍るとて昨日はえま

いり侍らさりしといふさやうの人のたましぬ

を鬼のとりにてもてきたるにやとおもふにも

かつみるくあるものともおほえすあやうく

おそろしとおほす人々よへみやられし火は

しかことくしきけしきも見えさりしをといふ

ことさらこそきていかめしくも侍らさりしと

いふけからひたる人としてたちなからをひかへ

しつ・大將殿はみやの御むすめもちたまへ

りしはうせ給てとしころになりぬる物をた

れをいふにかあらんひめ宮をききたてまつ

り給てよにこと心をはせしなといふ・あま君

よろしくなり給ぬかたまあきぬれはかくうた

である所にひさしくおはせむもひんなしとて

かへるこの人は猶いとよはけなりみちのほと

もいかゝものし給はんいと心くるしきことゝいひ

10
ウ

11
オ

あへりくるまふたつしておい人のりたまへる

にはつかうまつるあまふたりつきのにはこ

のひとをふせてかたはらに今人ひとりそ

ひて道すからゆきもやらすくるまといめ

てゆまいりなし給・ひえさかもとにを野と

いふ所にそ住たまひけるそこにおはしつゝ

くほといとをしなやかやとりをまうくへか

りけるなといひて夜ふけておはしつきぬ・

僧都はおやをあつかひむすめのあま君は

このしらぬ人をはくゝみてみないたきおろ

11
ウ

しつゝやすむおいのやまひのいつともなき

かくるしと思たまへしとをみちの名こりこ

そしはしわつらひ給ひけれやうくよろしく

成たまひにければ僧都はのほり給ひぬ・かゝる

人なんゐてきたるなとほつしのあたりに

よからぬことなれは見さりし人にはまねは

すあま君もみなくちかためさせつゝもし

尋くる人もやあるとおもふもしつ心なし
いかてさるぬ中人のすむあたりにかゝる
人おちあふれけん物まうてなとしたり

12
才

ける人の心ちなとわつらひけんをまゝはゝ
なとやうの人のたはかりてをかせたるに
やとそおもひよりける・河になかしてよとい
ひしひとことよりほかに物もさらにのたまは
ねはいとおほつかなくおもひていつしか人に
もなしてみんとおもふにつく／＼としておきあ
かるよもなくいとあやしくのみ物したまへは
つゐにいくましき人にやとおもひながら打
すてんもいとおしくいみし・夢かたりも
し出てはしめよりのらせしあさりにもしの

12
ウ

ひやかにけしやくことせさせ給うちはづへかく
あつかふほとに四五月も過ぬいとわひしく
かひなき事を思ひ侘て僧都の御もとに

猶をり給へ此人たすけ給へさすかにけふ
までもあるはしぬましかりける人をつき
しみりやつしたる物のさらぬにこそあめ
れあか仏京に出給はゝこそあらめこそまては
あへなむなといみしき事をかきつゝけて
たてまつ^れ給へれはいとあやしきことかな
かくまでもありける人のいのちをやかて

13
才

うちすてましかはさるへき契ありてこそは
我しも見つけゝめ心みにたすけはてむかし
それにとまらすはこつつきにけりとおもはん
とており^結へり・よろこひをかみて月ころ
のありさまをかたるかくひさしくわつらふ
人はむつかしきことをのつからあるへきをい
さゝかおとろへすいときよけにねちけた
る所なくのみ物し給てかきりとみえな
からもかくてもいきたるわさなりけりなと
おほな／＼なく／＼の給へはみつつけしよりめつ

らかなる人の御あり様かないてとてさし
 のそきて見給てけにいときやうさくなり
 ける人の御ようめいがなくとくのむくひに
 こそかゝるかたちにもおい出給ひけめいかなる
 たかひめにてかくそこなはれたまひけんも
 しさにやときゝあはせらるゝ事もなしや
 ととひ給・さらに聞ゆることもなしなにか
 は 思マデナシイ はつせの観音のたまへる人なりとのたまへ
 はなにかそれえんにしたかひてこそ道ひき
 給はめたねなき事はいかてかなとのたまふ

あやしかりてすほうはしめたりおほやけのめ
 しにたにしたかはすぶかくこもりたる山を
 出給てすゝろにかゝる人のためになんおこ
 なひさはき給と物のきこえあらんときゝ
 にくかるへしとおほし弟子ともゝいひて人に
 きかせしとかくす・僧都いてあなかまたいと

13
ウ14
オ

こたちわれむさむの法師にていむことの中
 にやふるかいはおほからめとをんなのすぢ
 につけてまたそしりとらすあやまつこと
 なしよはひ六十にあまりていまさらに人の

14
ウ

もときおはんはさるへきにこそあらめとのたまへ
 はよからぬ人の物をひんなくいひなし侍とき
 には仏法のきすとなり侍るなりと心よか
 らすいふ・このすほうのほとにしろしみえすは
 といみしきことゝもをちかひ給てよひとよ
 かちし給へるあかつきに人にかりうつしてな
 にやうの物のかく人をまとはしたるそとあ
 りさまばかりいはせまほしくて弟子のあさ
 りとり／＼にかちし給月比いさゝかもあらはれ
 さりつる物のけてうせられて・をのれはこゝ
 まてまふてきてかくてうせられたてまつる
 へき身にもあらず昔はおこなひせし法師

15
オ

のいさゝかなるよにうらみをとゝめてたゝ
 よひありきし程によき女のおまたすみ
 給し所にすみつきてかたへはうしなひてしに
 この人は心と世をうらみ給てわれいかて
 しなるといふ事をよるひるの給ひしにた
 よりをえていとくらき夜ひとり物し給し
 をとりてしなりされとくはんをんとさまかう
 さまにはくゝみ給ければ此僧都にまけ

たてまつりぬ今はまかりなんとのゝしる
 かくいふはなにそとゝへはつきたる人ものは
 かなきけにやはかゝしくもいはすさうしみの
 心ちはさはやかにいさゝか物おほえて見まはし
 たればひとりみし人のかほはなくてみなお
 いほうしゆかみおとろへたる物とものみおほか
 れはしらぬくにゝきにける心ちしいと
 かなしありしよのことおもひ出れとすみけん
 ところたれといひし人とたにたしかに

15
ウ

はかゝしくもおほえすたゝ我はかきりとて
 身をなけし人そかしいつこにきにたるに
 かとせめておもひいづれはいといみしと物を
 おもひなけてみな人のねたりしに妻戸
 をはなして出たりしに風はけしく河なみも
 あらぶきこえしををひとりものをそろし
 かりしかはきしかた行す氣もおほえてす
 のこのはしに足をさしおろしなからいくへき
 かたもまとはれてかへりいらんも中空にて
 心つよくこのよにうせなんと思たちしを
 をこかまして人に見つけられんよりは
 をにもなにもくひてうしなひてよといひ
 つゝつくゝとゐたりしをいときよけなるお
 とこのよりきていさ給へをのかもとへとい
 ひていたく心ちせしをみやときこえし人の
 し給とおほえしほとより心ちまとひに

16
ウ16
オ

けるなめりしらぬ所にすへをきて此男き
え失ぬと見しをつゐにかくほいのことも
せずなりぬると思ひつゝいみしくなくと
思ひしほとにそのゝちのことはいかにもく
おほえす・人のいふをきけはおほくの日来

もへにけりいかにうきさまをしらぬ人に

あつかはれ見えつらんとはつかしくつゐにかくて
いきかへりぬるかとおもふも口おしければいみ
しくおほえてなかくしつみ給へりつる日

ころはうつし心もなきさまにて物いさゝかま
いるおりもありつるを露はかりのゆをたに
まいらす・いかなれはかくたのもしけなくのみは
をはするそうちはへぬるみなとし給へること
はさめ給てさはやかに見え給へはうれしく
おもひきこゆるをとなくくたゆむおりなく

そひめてあつかひきこえ給ある人くもあた

17
才

17
才

らしき御さまかたちをみれば心をつくしてそ
おしみまもりける・心には猶いかてしなんと
そ思わたり給へとさはかりにていきとまり
たる人の命なれはいとしうねくてやうく
かしらもたけ給へは物まいりなし給に
そなかくおもやせもていくいつしかとうれし

くおもひきこゆるにあまになし給てよさ
てのみなんいくやうもあるへきとのたまへ
はいとをしけなる御さまをいかてかさはな

したてまつらんとてたゞいたたきはかりを
そき五かいはかりをうけさせたてまつる心
もとなけれともよりをれくしき人の
心にてえさかしくしあてものたまはず僧
都はいまはかりにていたはりやめたて
まつり給へといひをきてのほり給ぬ・夢
のやうなる人を見たてまつるかなとあま
君はよろこひてせめておこしすへつゝ御

18
才

くしてつかうけつり給さはかりあさましくひき
ゆひてうちやりたりつれといたくもみた

18
ウ

れすときはてたれはつや／＼とけふらなり
ひとゝせたらぬつくもかみおほかる所にて
めもあやにいみしき天人のあまくたれる
をみたらむやうにおもふもあやうき心ちすれと
なとかいと心つくかはかりいみしくおもひきこ
ゆるに御心をたてゝは見え給いつこにたれ
ときこえし人のさる所^にはいかておはせ
しそとせめてとふをいとはつかしとおもひて
あやしかりし程にみなわすれたるにやあら
むありけんさまなともさらにおほえ侍らす

19
オ

たゝほのかにおもひ出る事とてはたゝいか
て此世にあらしとおもひつゝたくれことに
はしちかくてなかくめしほとにまへちかくおほ
きなる木のありししたより人の出き

てゐていく心ちなんせしそれよりほかのこと
は我ながら誰とも^え おもひいてられ侍らすと
いとらうたけにいひなして世中に猶あり
けりといかて人にしられしきゝつくる人も
あらはいといみしくこそとてない給あまり
とふをはくるしとおほしたればえとはす

19
ウ

かくやひめを見つけたりけんたけとりの
おきなよりもめつらしき心ちするにいかなる
物のひまにきえうせんとすらむとしつこゝ
ろなくそおほしける・此あるしもあてなる
人なりけりむすめのおま君はかんだちめ
のきたのかたにてありけるかその人な
くなり給て後むすめたゝひとりをいみし
くかしつきてよききんたちをむこにして
おもひあつかひけるをそのむすめのなく
なりにければ心うしいみしとおもひ入てか

20
オ

たちをもかへかゝる山里には住はしめたる
 なりけり夜とゝもに恋わたりの形見
 に おもひよそへつへからん人をたに見出でし
 な とつれゝも心ほそきまゝに思なけきけ
 るをかくおほえぬ人のかたちけはひもま
 さりさまなるをえたれはつづゝのことゝもおほ
 えすあやしき心ちしなからうれしとおもふ・
 ねひにたれといときよけによしありて
 ありさまもあてはかなりむかしの山さと
 よりは水のをとみなこやかなりつくりさ

まゆへある所のこたちおもしろくせんさい
 なともおかしくゆへをつくしたり・秋になり
 ゆけは空のけはひあはれなるをかと田
 のいねかるとて所につけたる物まねひし
 つゝわかき女ともはうたうたひけつしあへりひ
 たひきならすをともおかしく見しあつま
 ちの事 なともおもひいてられてかの夕きり

20
ウ

のみやすところのおはせし山さよりは今
 すこしいりて山にかたかけたる家なれは松
 かけしけく風のをとめいと心ほそぎにつれ

つれにをこなひをのみしつゝいつともなくし
 めやかなり・あま君そ月なとあかき夜はき
 むなとひき給ふ少将のあま君なといふ

人はひわ引なとしつゝあそぶかゝるわさは
 し給やつれゝなるになといふむかしもあ
 やしかりける身にて心のとかにさやうのこと

すへきほともなかりしかはいさゝかおかしきさ
 まならすもおひいてにける哉とかくさた

すきける人の心 やるめるおりゝにつけて
 はおもひいつ・なをあさましく物はなかなかり

けると我なからくちおしければ手ならひに

身をなけしなみたの河のはやきせをしから
 みかけてたれかとゝめしおもひの外に心づ

21
ウ21
オ

ければ行すゑもうしろめたくつとましき

まておもひやる月のあかきよな／＼おひ

人ともはえんに歌よみにしへおもひ出つゝ

さま／＼の物かたりなとするにいらふへき

かたもなければつく／＼とうちなかめて

われかくてうき世中にめづるともたれかはしらん

月の都にいまはかきりと思はてしほとは恋しき

22
才

人おほかりしかとこと人／＼はさしもおもひ出

られすたゝおやいかにまとひ給けんめのとよ

ろつにいかてひとなみ／＼になさんとおもひ

いられしをいかにあへなき心ちしけんいつこにあ

らんわれよにあるものとはいかてかしらん

おなし心なる人もなかりしまゝによろつへ

たつることなくかたらひみなれたりし右近

なともおり／＼はおもひ出らるゝわかき人のかゝ

る山里にいまはおもひたえこもるはかたき

わさなりければたゝいたくとしへにける

22
ウ

あま七八人そつねの人にてありけるそれしか

むすめむまこやうのものともしきやつにみやつ

かへするもことさまにてあるも時々そゝかよひ

けるかやうの人につけて見しわたりにゆき

かよひをのつからよに有けりとたれにも／＼

きかれたてまつらんこといみしくはつかしかるへ

しいかなるさまにてさすらへけんなにおも

ひやりよつかすあやしかるへきをおもへはかゝ

る人／＼にかけてもみえすたゝ侍従こも

きとてあま君のわか人にしたるふたりを

23
才

のみそこの御かたにいひわきける見めも

心さまもむかしみし宮ことりにゝたることなし

何事につけても世中にあらぬ所はこれに

やらんとそかつは思ひなされけるゝかくのみ人

にしられしと忍び給へはまことにわつらは

しかるへきゆへある人にも物し給らんとてく

はしきことある人／＼にもしらせず・あま君の
むかしのむこの君今は中将にて物し給ける
をととのせんしの君僧都の御もとにもの
したまひける山こもりしたるをとふらひに

23
ウ

はらからのきみたちつねにのほりけりよ川
にかよふみちのたよりによせて中将こゝに
おはしたりさきうちをひてあてやかなる
男のいりくるを見いたして忍ひやかにて
おはせし人の御さまはひそさやかにおもひ
出らるゝこれもいと心ほそきすまゐのつれ／＼
なれとすみつきたる人々は物きよけに
おかしくしなしてかきほにうへたるなてしこ
もおもしろくをみなへしきゝやうなと咲はし
めたるに色／＼のかりきぬすかたのおとこ
とものわかきあまたして君もおなしさう
そくてみなみおもてによひすへたれば

24
オ

うちなかめてゐたり^イ年廿七八のほとにて
ねひとゝのへこゝちなからぬさまもてつけ
たりあま君さうしくちにきちやうたてゝ
たいめんし給まつうちなきてとし比のつもり
には過にしかたいとゝけとをくのみなん侍
を山さとのひかりに猶まちきこえさする
ことのうちわすれすやみ侍らぬをかつはあや
しくおもひ給ふるとの給へは・心のうちあはれ
に過にしかたのことゝもおもふ給へられぬおり
なきをあなかにすみはなれかほなる
御ありさまに^セこたりつゝなむ山こもりもつら
やましくつねに出たち侍をおなしくはなと
したひまとはさるゝ人／＼にさまたけらるゝ
やうに侍てなんけふはみなはふきすてゝ物
し侍つるとの給・山こもりの御つらやみは中
／＼いまやうたちたる御物まねひになん
むかしをおほしわすれぬ御心はへも世になひ

24
ウ

かせ給はさりけるとおろかならず思給へら

るゝおりおほくなといふ・人／＼に水はんなど

やうの物くはせ君にもはすのみなとやうの

物出したれはなれにしあたりにてさやうの

こともつゝみなき心ちして村雨のふりいつる

にとゝめられて物かたりしめやかにし給いふ

かひなくなりにし人よりもこの君の御心

などのいとおもふやうなりしをよその物に

おもひなしたるなんいとかなしきなとわ

すれかたみをたにとゝめ給はすなりにけ

むとこひ忍ぶる心なりければたまさかにか

く物したまへるにつけてもめつらしくあは

れにおほゆへかめるまゝにとはすかたりもし

いてつへし・ひめ君はわれは我とおもひ出る

かたおほくてながめ出し給へるさまいとつつ

くし白きひとへのいとなさけなくあさやき

25才

25才

たるにはかまもひはた色にならひたる

にやひかりも見えすぐるきをきせてたて

まつりたれはかゝることゝもゝみしにはかは

りてあやしくもあるかなとおもひつゝこ

は／＼しくいらゝきたる物ともき給へる

しもいとをかきすかたなりおまへなる

人／＼こひめ君のおはしまいたる心ちのみ

しはへるに中将とのをさへみたてまつれば

いと哀にこそおなしくは昔のさまにておは

しまさせはやいとよき御あはひならんかし

といひあへるをあないみしやよにありて

いかにも／＼人に見えんこそそれにつけてそ

むかしのこともおもひ出らるへきさやうのすちは

おもひたえてわすれなと思ふ・あま君入給

づるまにまらふとあめのけしきを見わつ

らひて少将といひし人の声をきゝしり

26才

26才

てよひよせ給へり昔みし人／＼はみなこゝに
物せらるらむやとおもひなからもかづまいり
くる事もかたくなりたるを心あさきに
やたれも／＼みなし給らんなどのたまふつ
かへまつりなれにし人にてあはれなりし
むかしのことゝももおもひ出たるつめてに
かのらうのつまいりつるほと風のさはかし
かりつるまされにすたれのひまよりなへて
のさまにはあるまじかりつる人のうちた

れかみの見えつるは世をそむき給へるあ
たりにたれそとなむみおとろかれつると
の給・ひめ君のたち出給へりつるうしろ
てをみたまへりけるなめりとおもひてまし
てこまかに見せたらは心とまり給なんかし
昔人はいとこよなくをとり給へりしを
たにまたわすれかたくし給めるをと心ひとつ
に思て・すきにし御ことをわすれかたくな

27
才

さめかね給めりしほとおほえぬ人をえ
たてまつり給てあけ暮のみものにおも

ひきこえ給めるをうちとけたまへる御あり
さまをいかてか御らんしつらなといふ・けること
こそはありけれとをかくてなに人ならんけに
いとおかしかりつとほのかなりつるを中／＼思い
つこまかにとへとそのまゝにもいはすをのつ
からきこしめしてんとのみいへはうちつけに
とひたつねんもさまあしき心ちして雨も
やみぬ日もくれぬへしといふにそゝのかさ
れて出給まへちかきをみなへしを折てな
に
匂ふらんとくちすさみてひとりこちたてり・
人の物いひをさすかにおほしとかむるこそなと
こたいの人ともは物めてをしあへりいときよ
けにあらまほしくもねひまさり給にける
かなおなしくは昔のやうにても見たてまつ

27
ウ28
才

らはやとて頭中納言の御あたりにほたえ
 すかよひ給や^うかなれと心もとゝめ給はすお
 やのとのかちになんものし給とこそいふなれ
 とあま君もの給て・心うく物をのみおほ
 しへたてたるなむいとつらきまはな
 をさるへきなめりとおほしなしてはれ／＼し

くもてなしたまへこのいつとせむとせときの
 まもわすれず恋しくかなしとおもひつる
 人のうへもかくみたてまつりて後よりはこよ
 なくおもひわすれにて侍る思きこえ給

へき人／＼よにおはすとも今は世になき物
 にこそやう／＼おほしなりぬらめよるつのと
 とさしあたりたるやうにはえしもあらぬわさ
 になんといふにつけてもいとゝ涙くみて・へ
 たてきこゆる心も^傳はくらねとあやしうていき
 かへりけるほどによろつことゆめのやうに

28
ウ29
オ

たとられてあらぬ世にむまれたる人はかゝる
 心ちやすらんとおほえ侍れは今はしるへき
 人世にあらんともおもひ出すひたみに
 こそむつましくおもひきこゆれとの給さま
 もけに何心なくうつくしくうちゑみてそま
 もりゐたまへる・中將は山におはしつきて僧
 都もめつらしかりて世中の物かたりし給その
 夜はとまりてこゑたうとき人／＼に経なとよ
 ませてよひと夜あそひ給せんしの君こま
 かなる物かたりなとするついでに[※]あのに立

よりてものあはれにもありしかなよをすて
 たれと猶さはかりの心はせある人はかくこそ
 などの給つゐてに風のふきあけたり
 つるひまよりかみいとなくおかしけなる
 人こそみえつれあらはなりとや思つらん
 立てあなたに入つるうしろてなへての人と
 は見えさりつさやうの所によき女はをきた

29
ウ

るましき物にこそあめれあけくれみる物は
法師なりをのつからめなれておほゆらん
ふひんなることなりかしとの給・せんしの

君此春はつせにまうてゝあやしくて見出た
る人となんきゝ侍しとてみぬことなれば
こまかにはいはすあはれなりけること哉
いかなる人にかあらん世中をうしとて

そさる所にはかくれあけんかし昔物かたり
の心ちもするかなとの給またの曰かへり
たまふにもすぎかたくなとておはしたり
さるへき心つかひしたりければむかしおもひ出
たる御まかなひの少将のあまなとも

そてくちさまことなれとをかしいとゝいや

めにあま君は物し給ものかたりのつゐてに
忍たるさまにものしたまふらんはたれにかと
とひ給わつらはしけれとほのかにも見つけ

30
才30
ウ

給てけるをかくしかほならんもあやしとて忘
わひ侍りていとゝつみふかくのみおほえ侍つる
なくさめにこの月こる見給ふる人になんい
かなるにかいと物おもひしけさまにて世
にありと人にしられん事をくるしけに

おもひてものせらるればかゝる谷の底には
たれかは尋ねきこえんとおもひつゝ侍をいかて

かはきゝあらはさせ給^へやらんといふ^ふ・うちつけ心

ありてまいりこんどたに山^にふかき道のかこ

とはきこえつへしましておほしよそふらんかた

につけてはことゝにへたて給ましきことに

こそはいかなるすちに世をうらみ給人にか

なくさめきこえはやなとゆかしけにの給出

たまふとてたゝうかみに

あたし野の風になひくなをみなへしわれ
しめゆはんみちとをくともとかきて少将のあ
ましていれたりあま君も見給てこの御かへり

31
才

かゝせ給へいと心にくきけつき給へる人なれ
 はうしろめたくもあらしとそ^そものかせはいとあや
 しき手をはいかてか^ととてさらにきゝ給はねは
 はしたなきことなりとてあま君きこえさせ
 つるやうによつかす人にゝぬ人にてなん

うつしうへておもひみたれぬをみなへし
 うき世をそむく草のいほりにとあり^こまたみ
 はさもありぬへしとおもひゆるしてかへりぬふ
 みなとわさとやらんはさすかにうぬ／＼しく
 ほのかにみしさまはわすれす物思らんすち何

事としらねと哀なれは八月十日のほと
 にこたかゝりのつゐてにおはしたりれいの
 あまよひい出てひとめ見しよりしつ心なくて
 な^んとの給へりいらへ給へくもあらねはあま
 君まつちの山となんみ給ふ^なといひ出し給・
 たいめんし給へるにも心くるしきさまにて物し

31
ウ32
オ

たまふときゝ侍し人の御うへなんのこりゆか
 しく侍何事も心になはぬ心ちのみし侍
 れは山すみもし侍らまほしき心ありなからゆる
 い給ましき人／＼におもひさはりてなんすくし

侍よに心ちよけなるひとのうへはかくくした
 る人の心からにやぶさはしからすなん物おもひ給
 らん人におもふことをきこえはやなといと心
 とゝめたるさまにかたらひ給・心ちよけなら
 ぬ御ねかひはきこえかはし給はんにつきなから
 ぬさまになん^{見え}侍れとれいの人にてあらしと
 いとつたゝあるまて世をうらみ侍めれはのこり
 すくなきよはひの人たにいまはとそむき
 侍ときはいと物心ほそくおほえ侍し物を
 よをこめたるさかりにてはつゐにいかゝと
 なむ見給へ侍とおやか^りていふ・いりてもなさ
 けなし猶いさゝかにてもきこえ給へかゝる御

32
ウ33
オ

すまぬはすゝるなることもあはれしるこそ
よのつねのことなれなとこしらへて^も いへと人
にものきこゆらんかたもしらす何事もいふ
かひなくのみこそといとつれなくてふし給
へり・まゆふとはいつらあな心う秋をちきれる
はすかし給にこそありけれなとうらみつゝ

松むしのこゑをたつねてきつれともまた
おきはらの露にまとひぬあないとをしこれ

をたにとせむれはさやうによついたらんこと
いひいてんもいと心うくまたいひそめては
かやうのおりくゝにせめられんもむつかしうお
ほゆれはいらへをたにし給はねはあまりい
ふかひなくおもひあへり・あま君はやうは
いまめきたる人にそける名^なこりなるへし
秋の野の露わけきたるかり衣むくら
しけるやとにかこつなとなんわつらはし
かりきこえ給めるといふをうちに^も猶

33
ウ

かく心よりほかによりありとしられはしむる

をいとくるしとおほす心のうちをはしらて
おとこ君をもあかすおもひいてつゝ恋わたる
人くゝなれはかくはかなきつゝあてにもうちかた
らひきこえ給へらん心よりほかによりつし
ろめたくは見え給はぬ物をよのつねなるす
ちにおほしかけすともなさけなからぬほとに
御いらへはかりはきこえ給へかしなとひきつこ
かしつへくいふさすかにかゝるこたいの心とも
はありつかすいまめきつゝおしおれうたこの
ましけにわかやくけしきともはいとつしるめ
たくおほゆ・かきりなくつき身なりけりと
みはてゝしいのちさへあさましくなくていかな
るさまにさすらふへきならんひたふるになき
物と人にみきゝすてられてもやみなはや
とおもひふし給へるに中將はおほかた物おも

34
ウ34
オ

はしきことのあるにやいといたく打なけきつゝ
忍ひやかに笛ふきならしてしかのなく音に
なとひとりこつけはひまことに心ちなく
はあるまし過にしかたの思出らるゝにもな
かゝ心つくしにいまはしめてあはれとおほすへ

35
才

きひとはたかたけなれは見えぬ山ちにもえ
おもひなすましくなんとつらめしけにて出
給なんとするにあま君などあたを御
らんしさしつるとてあさり出給へりなにかを
ちなるさとも心みは^ゆりぬれはといひす
さみていたくすきかましからんもさすかにひん
なしいとほのかに見えしさまのめとまりしは
かりつれゝなる心なくさめにおもひ出つる
をあまりもてはなれおくふ^かかなるけはひも
所のさまにあはすすさましとおもへはかへり

なんとするを・笛のねさへあかすいと おほえて

35
才

ふかき夜の月をあはれとみぬ人や山のはち
かきやとにとまらぬとなまかたはなることを
かくなむとこえ給といふ心ときめきして

山のはに入まで月をなかめみんなねやのいたま

もしるしありやとなといふに・このおほあ

ま君ふえの音を ほのかに^{きこ}聞つけたりけれ

はさすかにめてゝ出きたりこゝかしこうちし

はふきあさましきわなゝき声にて中ゝむ

かしの事なともかけていはすたれともあ

36
才

もひわかぬなるへしいかてそのきんのことひ
き給へよこ笛は月にはいとおかしきものそ
かしいつらくそたちことゝりてまいれといふ
に・それなゝりとをしはかりにきけといかなる
所にかゝる人いかてこもりゐたらんさため
なき世そこれにつけて哀なる・はんしき
てうをいとをかくふきていつらさらはとの
給むすめのおま君これもよきほとすき

はらなる人にとひきゝて・いまやうのわかき
 人はか^う やうなることをそのまれさりける
 こゝに月ころものし給めるひめ君かたちはい
 ときよらに物し給めれともはらかゝる^{あた} わさ
 なとし給はず^むもれてなんものしたまふめ
 るとわれかしこにうち^あ わらひてかたるをあま
 君なとはかたはらい^あたしとおほすこれにこ
 とみなさめてかへり給ほとも山おろしふきて
 きこえくる笛のねいとをかしうきこえてを^あ
 きあかしたるつとめて・よへはかた／＼心みたれ
 侍しかはいそきまかて侍し

わすられぬむかしのことも笛竹のつらきふし
 にもねそなかけける猶すこしおほししるはかり
 をしへなさせ給へしのはれぬへくはすき／＼し
 きまても何かはとあるをいとゝわひたるは涙
 とゝめかたけなるけしきにてかきたまふ

笛の音にむかしのこともしのはれてかへり

38
ウ

しほとも袖そぬれにしあやしく物おもひしら
 ぬにやとまて見侍ありさまはおい人のと
 はすかたりにきこしめしけんかしとあり・

めつらしからぬも見ところなき心ちして
 うちをかれけんかし・おきの葉にをたらぬ
 ほと／＼にをとつれわたるいとむつかしくも
 あるかな人の心はあなかななるもの成けり
 と見しりにしおり／＼もやう／＼おもひ出る
 まゝになをかゝるすちのこと人にもおもひは
 なたすへきさまにとくなし給てよ^とうて経な
 らひてよみ給心のうちにもねんし給へり・
 かくよろづにつけて世中をおもひ^す つれば
 わかき人とおかしやかなることもことに
 なくむすほ^はれたる本上なめりとおもふ
 かたちの見るかひありうつくしきによろづ
 のとかみゆるしてあけくれのみものにした

39
ウ

39
オ

りすこしうちかたらひ給おりはめつらしく めで とき
 物におもへり・九月になりてこのあま君
 はつせにまつつとしころいと心ほそき身
 に恋しき人のうへもおもひやまれさりし
 をかくあらぬ人ともおほえ給はぬなくさめを
 えたれはくはんおむの御しるしうれしとてかへ
 り申たちてまつて給成けりいさたまへ

40
才

人やしらむとするおなし仏なれとさやう
 の所にをこなひたるなんしるしありて
 よきためしおほかるといひてそゝのかした
 つれと昔はゝきみめのとなとのかやうにいひ
 しらせつゝたひゝまつてさせしをかひなき
 にこそあめれいのちさへ心になはすたくひ
 なきいみしきめをみるはと いと 心うきうちにも
 しらぬ人にくしてさる道のありきをした
 らむよとそらをそろしくおほゆ心 ゆ こはき
 さまにはいひもなさてこゝちのいとあしく

のみ侍れはさやうならんみちのほとにもいかゝ
 なとつゝましくなんとの給ものをちはさも
 したまふへき人そかしとおもひてしめて
 もいさなはず

はかなくて世にふる河のうき瀬にはたつね
 もゆかし二もとの杉とてならひにまじりたる
 をあま君見つけてふたもとはまたもあひ
 きたらんと思ひたまふ人あるへしとた
 はふれことをいひあてたるにむねつふれ
 ておもてあかめ給へるもいとあひきやうわつ

きうつくしけなり

ふる河の杉のもとたちしらねともすきにし
 人によそへてそみることなることなきいらへ
 をくちとくいふ・忍ひてといへとみな人したひ
 つゝこゝには人すくなにておはせんを心くるし
 かりて心はせある少将のあまさゑもとて

40
ウ41
才

あるおとなしき人わらは斗そとゝめたり
けるみな出たちぬるをなかも出てあさま
しき事をおもひなからもいまはいかゝはせん
とたのもし人におもひふひと独ものしたはぬは

41
ウ

心ほそくもあるかなといとつれゝなるに・
中將の御ふみあり御らんせよといへと聞も
いれ給はすいとゝ人も見えすつれゝときし
かたゆくさきを思ひくゝし給くるしきまで
もなかめさせ給かな御こつたせたまへとい
ふいとあやしくこそはありしかと^はの給へ
とうたむとおほしたればむとりにやりて
われはとおもひてせんせさせたまつり
たるにいとこよなければまたてなをし
てうつあまうへとくかへらせ給はなんこの御

42
オ

こ見せたてまつらむかの御こそいとつよか
りし僧都の君はやうよりいみしくこの

ませたまひてけしうはあらずとおほし

たりしをいときせいたいとくになりて

さし出てこそうたさめ御こにはまけしかし

ときこえ給しにつゐにそうつなんふたつ

まけ給しきせいか暮にはまさらせ給へき

なめりあないみしとけうすればさた過たる

あまひたひのみつかぬにものこのみするに

むつかしきこともしそめてけるかなとおもひて

42
ウ

心ちあしとてふし給ぬ・ときゝはれゝしく

もてなしておはしませあたら御身をいみしく

しつみてもてなさせ給ふこそくちおし

く玉にきすあらん心ちし侍れといふ・夕暮

の風の音も哀なるにおもひ出ること

おほくて

心には秋の夕をわかねともながむる袖に

露そみたるゝ月さし出ておかしきほとにひ

るふみありつる中將おはしたりあなう

たてこはなそとおほえたまへはおくふかく

いりたまふをさもあまりにもおはします

かな御心さしのほともあはれまさるおりに

こそい¹⁰めれほのかにもきこえ給はんことも

きかせ給へしみつかんことのやうにおほし

めしたるこそなといふにいとつしるめた

くおほゆおはせぬよしをいへとひるのつか

ひのひとゝころなととひきゝたるなるへ

し・いと事おほくつらみて御こゑもきゝ

侍らしたゝけり¹⁵かくてきこえんことをきゝ

にくしともおほしことはれとよるつにいひ

侘ていと心つくところにつけてこそ物のあ

はれもまされあまりかゝるはなとあはめつゝ

山里の秋の夜ふかきあはれをも物おもふ人

はおもひこそしれをのつから御心もかよひぬ

へきをなとあれは・あま君おはせてまきら

43
才

43
ウ

はしきこゆへき人も侍らずいとよつかぬやう
ならんとせむれは

うき物とおもひもしらて過す身をもの思ふ

人とひとはしりけりわさといふともなき

をきゝてつたへきこゆれはいとあはれと

おもひてなをたゝいさゝかいてたまへと

きこえうこかせとこの人／＼をわりなきまで

うらみ給・あやしきまでつれなくそ見え給や

とていりてみれば かり^{れい}そめにもさしのそき

給はぬおい人の御かたに入給にけりあさまし

く思ひてかくなるときこゆれはかゝる所に

ななめ給らん心のうちのあはれにおほかた

のありさまなともなさけなかるましき人

のいとあまりおもひしらぬ人よりもけに

もてなし給めるこそそれも物こりしたまへる

か猶いかなるさまに世を恨ていつまでお

44
才

44
ウ

はすへき人そなとありさまとひていとゆ
 かしけにのみおほいたれとこまかなることはい
 かねかはいひきかせんたゝしりきこえたま
 ふへき人のとしころはうとゝしきやうにて
 すくし給ひしをはつせにまうてあひ給て
 たつねきこえ給つるとそいふ・ひめ君は
 いとむつかしとのみきくおい人のあたりにう
 つふしゝゝていもねられすよひまとひはえ
 もいはすおとろゝしきいひきしつゝまへにも
 うちすかひたるあまともふたりしてをと
 らしといひきあはせたりいとおそろしくこ
 よひこの人ゝにやくはれなんとおもふも
 おしからぬ身なれとれいの心よはさはひと
 はしあやうかりてかへりきたりけんものゝやう
 にわひしくおほゆこもきともにあておは
 しつれというめきてこのめつらしきおと
 このえんたちあたまへるかたにかへりあに

45
才

けりいまやくるゝとまちぬ給へれといと
 はかなきたのもし人なりや・中将いひわつら
 ひてかへりにければいとなさけなくおもれ
 てもおはしますかなあたら御かたちをなとそ
 しりてみなひと所にねぬ・よなかは^かりにや
 なりぬらんと思ほとにあま君しはふきおほ
 ほれておきにたりほかけにかしらつきはいと
 しるきにくるき物をかつきて此君のふし給
 へるをあやしかりていたちとかいふなる物がさる
 わさするひたいに手をあてゝあやしは誰
 そとしうねけなる声にて見をこせたる
 さらにたゝいまくひてんとするとそおほゆる
 おにのとりもてきけん程はものおほえさり
 ければ中ゝ心やすしいかさまにせんとおほ
 ゆるむつかしさにもいみじきさまにていき
 かへり人になりて又ありし色ゝのうき

45
ウ46
才

事をおもひみたれむつかしとおそろしと
物を思ふよしなましかは是よりもをそろし
けなるものゝ中にこそはあらましかとおもひ
やらる昔よりのことをまとるまれぬまゝに
つねよりもおもひつゝくるにいと心うくおや
ときこえけん人の御かたちも見たてまつらす

はるかなるあつまをかへるゝとし月をゆきて
たまさかにたつねよりてうれしたのもしと
おもひきこえしはらからの御あたりもおもはず
にてたえすきさるかたにおもひさため給へり
し人につけてやうゝ身のうさをもなく
さめつへききはめにあさましくもてそこな
ひたる身をおもひもてゆけは宮をすこし
もあはれと思ひきこえけん心そいとけしから
ぬたゝこの人の御ゆかりにさすらへぬるそ
とおもへはこしまのいろをためしにちきり給

46
ウ47
オ

しをなとておかしとおもひきこえけんとこよ
なくあきにたる心ちす・はしめよりうすきな
からものとかに物したまひし人は此おり
かのおりなとおもひ出るそこよなかりける
かくてこそ有けれと聞つけられたてまつら

むはつかしさは人よりまさりぬへしさすかに此
よにはありし御さまをよそなからたにいつか
はみんとするとおもふ猶わるの心やかくたに
おもはしなと心ひとつをかへさふちううらして
鳥のなくをきゝていとうれしはゝの御こゑ

をまして聞たらんはいかならんとおもひあか
して心ちもいとあし・ともにてわたるへき人
もとみにこねは猶ふし給へるにいいきの人
はいとゝくおきてかゆなとむつかしきことゝも
をもてはやしてあままへにとくきこしめせな
とよりきていへとまかなひもいと心つきなく
うたて見しらぬ心ちしてなやましくなると

47
ウ

ことなしひ給をしめていふもいとこちた
し・けすくしき法師はらなとあまたきて
僧都けふおりさせ給へしなどにはかには

48
才

とふなれは一品の宮の御ものけになや
ませ給ける山のさすみすほうつかまつら
せ給へと猶僧都まいり給はてはしるしな
しとて昨日ふたひなんめし侍し左大臣殿まじの
四位少将よへ夜更てなんのほりおはして
きさいの宮の御ふみなと侍ければおりさ
せ給なりといとはなやかにいひなす・はつ
かしくともあひてあまになし給てよとも
いはんさかしら人すくなくてよきおりにこそ
とおもへはおきて心ちのいとあしくのみ侍を
僧都のおりさせ給へらむにいむことうけ侍
らんとなんおもひ侍をさやうにきこえ給へ
とかたらひ給へはほけくしくうちうなつく

48
ウ

れいのかたにおはしてかみはあま君のみけつ
り給をこと人にてふれさせんもうたてお
ほゆるにてつからはたえせぬ事なればた
たすこしときくたして親にいま一たひかう
なからのさまを見えすなりなんこそ人
やりならすいとかなしけれいたくわつらひし
けにやかみもすこしおちほそりにたる心ち

すれと何はかりもおとろへすいとおほくて
六尺はかりなるすゑなとそうつくしかりけり
すちなともいとこまかにうつくしけなり
かくれとてしもとひとりこちあ給へり・くれ
かたに僧都物したまへり南おもてはらひ
しつらひてまるなるかしらつきともゆき
ちかひさはきたるもれいにかはりていと
おそろしき心ちす・はくの御かたにまいり給
ていかにそ月ころはなといふひんかしの御
かたはものまうてし給にきとかこのおは

49
才

せしひとはなを物したまふやな とゝひ給
しかこゝにとまりてなん心ちあしとこそ
物し給ていむことうけたてまつらんとた
まひつるとかたるたちてこなたにいまし
てこゝにやおはしますとてきちやうのもとに
つぬゝ給へはつゝましかれとぬさりよりて
いらへし給ふ・ふいにて見たてまつりそ
めてしもさるへき昔のちきりありけるに
こそとおもふ給へて御いのりなともねんこ
ろにつかうまつりしを法師は其事とな

50
才

くて御ふみきこえうけ給はらんもひんなけ
れはしねんなんおろかなるやうになり
侍ぬるいとあやしきさまに世をそむき
給へる人の御あたりにかくておはしますらん
とのたまふ・世中には侍へらしとおもひたち侍し
身のいとあやしうていまゝて侍を心うしとおも

49
才

ひは侍へる物からよるつにせさせたまひける
御心はへをなんいふかひなき心ちにもおもふたま
へしらるゝをなをよつかすのみつぬにえと
まるましくおもふたまへらるゝをあまになさ

50
ウ

せ給ひてよ世中に侍とまれいの人にてな
からふへくも侍らぬ身になんときこえ給・また
いとゆくさきとをける御ほとにいかてかひ
たみちにしかはおほしたらんかへりてつみある
事なりおもひたちて心をゝこし給ほと

はつよくおほせと年月ふれはをんなの御身
といふものいとたい／＼しき物になんとの
給へは・おさなく侍しほとよりものをのみお

もふへきありさまにておやなとも尼に
なしてや見ましなとなん思のたまひしまし

てすこ物おもひしり侍て後はれいの人
さまならてのちの世をたにと思ふ心ふかく

51
才

侍しをなくなるへきほとんどのやう／＼ちかくなり
侍にや心ちのいとよはくのみなり侍を猶いか
てとてうちなきつゝのたまふ・あやしうかゝる
かたちありさまをなとてみをいとはしくおも
ひはしめ給ひけんものゝけもさこそいふなり
しかとおもひあはするにさるやうこそあら
め今までもいきたるへき人かはあしきもの
の見つけそめたるにいとおそろしくあやう

51
ウ

き事なりとおほしてとまれかくまれおほ
したちての給を^三ほほうのいとかしこくほめ給
ことなりほうしにてきこえかへすへきことなら
す御いむことはいとやすくさつけたてま
つるへきをきうなることにてまかてたれは
こよひかの宮にまいるへく侍りあすよりやみ
すほうはしまるへく侍らん七日はてゝまかてんに
つかまつらむとのたまへは・かの尼君お
はしなはかならずさまたけてんとくちおしく

てみたり心ちのあしかりしほとにしたるやう

52
オ

にていとくるしく侍れははおもくならはいむ
ことかひなくや侍らんをけふはつれしき
おりとこそおもふ給へつれとていみしくなき
給へは・ひしり心にいと／＼をしくおもひて夜
や更侍りぬらん山よりをり侍ことむかしは
ことゝもおもふ給へられさりしをとしのおふる
まゝにはたへかたく侍ければうちやすみて
内にはまいらんとおもひ侍をしかおほしい
そくなればけふつかうまつりてんとの給に
いとうれしくなりぬはさみとりてくしのはこの
ふたさし出たれはいつらいたいとこたちこゝにと
よふはしめ見つけたてまつりしふたりなら
ともにありければよひ入て御くしおるしたて
まつれといふけにいみしかりし人の御あり
さまなればうつし人にてはよにおはせんも

52
ウ

うたてこそあらめとこのあさりもことはりに
おもふにきちやのかたひらのほころひより
御かみをかきいたし給へるかいとあたらしくお
かしけなるになんしはしは^はさみをもてやす
らひける・かゝるほど少将のあまはせうと

のあさりのきたるにあひてしもにゐたり^る

さゑもんはこのわたくしのしりたる人にあへ

しらふとてかゝる所につけてはみなとりく

に心よせのひとくめつらしくて出きたるには^はか

なきことしけるみいれなとしけるほとに

こもきひとりしてかゝることなんと少将のあ

まにつけたりければまとひてきてみるに

わか御うへのきぬけさなとをことさらはかり

とてきせたてまつりておやの御かたお

かみたてまつり給へといふにいつかたともしら

ぬほとなんえ忍ひあへ給はてなき給に

53
才53
ウ

ける・あなあさましやなとかくあふなきわさ
は^せさせ給うへかへりおはしましてはいかなることを
の給はせんといへとかはかりにしそめつるをい
ひみたるとも物なしと思ひて僧都いさ
め給へはよりてもえさまたけす流^界転三
る中なといふにもたちはてゝしものをと思
ひ出るもさすか成けり御くしもそきわつらひ
てのとやかにあま君たちしてなをさせ給
へといふひたひは僧都そゝき給ふかゝる

54
才

御かたちやつし給ひてくひ給ななとたうと
きことゝもと^ききかせ給とみにせさすへくも
なくみないひしらせ給へることをつれしくも
しつるかなとこれのみそいけるしるしあり
ておほえ給けるみな人くいてしつまりぬ・
よるの風の音にこの人くは心ほそき御
すまぬもしはしのことそいまいとめてたく
なり給なんとたのみきこえつる御身を

かくしなさせ給てのこりおほかる御よのす衆
をいかにせさせ給はんとするそおいおとろへ

54
ウ

たる人たに今はかきりとおもひはてられて
いとかなしきわさに待といひしらすれとなを
たゝいまは心やすくうれし世にふへき物とは
思かけすなりぬるこそはいとめてたきこと
なれとむねのあきたる心ちそしたまひける・
つとめてはさすがに人のゆるさぬ事なれば
かはりたらんさま見えんもいとつかしかみの
すそのにはかにおほとれたるやうにしとけ
なくさへそかれたるをむつかしきことゝもいはて
つくるはん人もかなと何事につけてもつゝ

55
オ

ましくてくらうしなしておはすおもふことを人
にいひつゝけんことのはゝもとよりたにはかゝ
しからぬみをまいてなつかしくこととはるへき人
さへなければたゝすくりにむかひておもひあ

まるおりはてならひをのみたけきことにて
かきつけ給ふ

なきものに身をも人をも思ひつゝすてゝ
し世をそさらに捨つるいまはかくてかきり
つるそかしとかきても猶みつからいとあはれとみ給
かきりそとおもひなりにしよの中をかへ

55
ウ

すゝもそむきぬる哉おなしすちのことを
とかくかきすさひぬ給へるに中将の御ふみ
あり物さはかしくあきれたる心ちしあへるほ
とにてかゝることなるといひてけりいとあへな
しと思ひてかゝる心のふかくありける人
なりければはかなきいらへをもしそめしと思
はなるゝなりけりさてもあへなきわさかな
いとおかしく見えしかみのほどをたしかにみ
せよとひとよもかたらひしかはさるへからん
おりにといひしものをといと口おしくて

56
オ

たちかへり・きこえんかたなきは

きしとをくこきはなるらむあま舟にのり

をくれしといそかるゝ哉れいならすととりて

見給物のあはれなるおりにいまはとおもふ

も哀なる物からいかゝおほさるらんいとはかな

きものゝはしに

心こそうきよのきしをはなれと行衆も

しらぬあまのつきゝをとれいの手ならひ

にし給へるをつゝみてたてまつるかきう

つしてたにこそとのたまへと中／＼かき

そこなひ侍なんとてやりつめつらしきに

もいふかたなくなしくなんおほえける・物

まつての人かへり給て思さはきたまふ

ことかきりなしかゝる身にてはすゝめきこ

えんこそはとおもひなし侍れとのこりおほ

かる御身をいかてへ給はんとすらんをのれ

はよに侍らんことけふあすともしりかたき

56
ウ

にいかてうしろやすく見をきたてまつらん

とよるつに思ふたまへてこそ仏にものり

きこえつれとふしまるひつゝいといみしけ

におもひ給へるにまことのおやのやかてから

もなき物と思ひまとひ給けんほとをし

はかるそまついとかなしかりけるれいのい

らへもせてそむきぬたまへるさまいとわ

かくうつくしければいと物はかなくそおはし

ける御心なれとなく／＼御そのことなとい

そき給にひ色はてなれしことなればこう

ちきけさなとしたりある人／＼もかゝる色

をぬひきせたてまつるにつけても おほ

えすつれしき山さとのひかりとあけくれ

みたてまつる物をくちおしきわさかなと

あたらしかりつゝ僧都をうらみそしりけり・

一品の宮の御なやみけにかのてしのいひしも

57
ウ

57
オ

しるくいちしるきことともありてをこた
 らせたまひにければいよ／＼いとたうとき
 ものにいひのゝしる名こりもおそろしと
 てみすほうのへさせ給へはとみにもえかへり
 いらてさふらひ給に雨なとふりてしめや
 かなるよめしてよゑにさふらはせ給曰ころ
 いたくさふらひこそしたる人はみなやすみな
 としておまへに人すくなにてちかくおきたる
 人すくなきおりにおなし御ちやうにおはし
 ましてむかしよりたのませ給中にも此たひ
 なんいよ／＼のちのよもかくこそはとたのも
 しきことまさりぬるなどのたまはず・世中
 にひさしく侍ましきさまに仏なとををしへ
 給へることゝも侍うちにとしらねんす
 くしかたきやうになん侍ければ仏もまき
 れなくねんしつと。侍らんとてふかくこもり
 侍をかゝるおほせことにてまかり出侍にし

58
才

なとけいし給御ものゝけのしうねきこと
 さま／＼になのるかをそろしき事などの給
 つゐてに・いとあやしくけうのことをなんみた
 まえしこの三月にとしおいて侍はゝの願あり
 て。瀬にまうてゝ侍しかへさの中やとりしを
 治の院といひはする所にまかりやとりしを
 かくのこと人すまてとしへぬるおほきなる
 所はよからぬ物かならずかよひすみておもき
 ひやうさのためあしきことゝもやと思ひ
 たまへしもしるくとてかの見つけたりし
 事ともをかたりきこえ給けにいとめつらしか
 なることかなとてちかくさふらふ人／＼みなね
 いりたるをおそろしくおほきれておとろ
 かさせ給大将のかたらひ給宰相のきみ
 しもこの事をきゝけりおとろかさせ給ける
 人／＼は何ともきかず僧都をちさせたまへ

59
才58
ウ

る御けしきを心もなきことけいしてけり

とおもひてくはしくもそのほとのことをはい

ひさしつ・その女人このたひまかりいて侍つる

たよりにをのに侍つるあまともあひとひ侍らん

とてまかり^もたりしになく／＼出家のほいふか

きよしねん比にかたらひ侍しかはかしらおる

し侍にきなにかしかいもをとこ系もんのか

みのめに侍しあまなん失にしをんなこの

かはりにとおもひよろこひ侍りてすいふん

にいたはりかしつき侍けるをかくなりにたれは

うらみ侍なりけにそかたちはいとるはしく

け^ふゆ^ふにておこなひやつれんもいとあし

けになん侍し何人にか侍けんともよくいふ

僧都にてかたりつゝけ申給へは・いかてか

さる所によき人をしもとりもてゆきけん

さりともしはしらぬらんなどの宰相

59
ウ

60
オ

の君そとふ・しらすさもやかたらひ侍らん

まことにやんことなき人ならは何かかくれ

も侍らしをやゐ中人のむすめもさるさま

したるこそは侍らめり^うのなかより仏む

まれ給はすはこそ侍らめたゝ人にてはいと

つみかろきさまの人になん侍けるなとき

こえ給・その比かのわたりにきえうせにけん

人をおほしいつこのおまへなる人もあね

君のつたへにあやしくてうせたる人とは聞

をきたれはそれにやあらんとはおもひけれ

とさためなきことなり僧都もかの人世

にある物ともしられしとよくもあらぬかた

きたちたる人もあるやうにおもひ^むけて

かくし忍ひ侍をことさまのあやしければけ

いし侍なりとなまかくすけしきなれば人

にもかたらず・みやはそれにもこそあれ大將

にきかせはやとこの人にそのたまはすれ

60
ウ

といつかたにもかくすへき事をさためて

さならんもしらすなからはつかしけなる人に

うち出のたまはせんもつゝましくおほして

やみにけり・ひめ宮をこたりはてさせ給て

僧都ものほり給ぬかしこにより給へれば

いみしくうらみて中／＼かゝる御ありさまに

てつみもえぬへきことをのたまひもあはせ

すなりにけることをなんいとあやしきなと

のたまへとかひもなし・今はたゞ御をこなひ

をしたまへおいたるわかきさためなき世な

りはかなき物におほしとりたるもことはりなる

御みややとの給にもいとほかしくなんおほし

ける・御ほうぶくあたらしくしたまへとてあ

やうすものきぬなといふものたてまつり

をきたまふなにかし侍らんかきりはつかうま

つりなん何かおほしわつらふへきつねの

61才

61才

よにおひ出てせけんの糸いくはにねかひ

まつはるゝかきりなところせくすてかたく

われも人もおほすへかめるかゝるはやしの中

にをこなひつとめたまはん身は何事^と

かはうらめしくもはつかしくもおほすへきこの

あらんいのちは葉のうすきかことしといひし

らせて松門^ににあかつきいたりて月^に徘徊す

と法師なれとよし／＼しくはつかしけなる

さまにてのたまふことゝを思ふやうにも

いひきかせ給かなときゝあたり・けふはひね

もすにふく風の音もいと心ほそきにおはし

たる人もあはれ山ふしはかゝる日にそねは

なかるなるかしといふを聞て我もいまは

山ふしそかしことはりにとまらぬなみたな

りけりとおもひつゝはしのかたにたち出て

みればはるかなる軒はよりかりきぬすか

62才

62才

た色／＼にたちましりてみゆ山へのほる
 人なりとてもこなたの道にはかよふ人も
 いとたまさかなりくる谷とかいふかたより
 ありく法師の跡のみまれまれば見ゆる
 をれいのすかたみつけたるはあひなくめつ
 らしきに此うらみわひし中将成けりかひ
 なきこともいはんとものしたりけるを紅
 葉のいとおもしろくほかのくれなるにそめ
 ましたる色／＼なれは入くるよりそ物あは
 れなりけるこゝにいと心ちよけなる人を
 見つけたら はあやしくそおほゆへきなと
 おもひて・はとまありてつれ／＼なる心ち
 し侍にも紅葉もいかにとおもふ給へてなん
 猶立かへりたひねもしつへきこのもとにこ
 そとてみいたしたまへり・あま君れいの涙
 もろにて

木からしの吹にし山のふもとにはたちかく

63
才

へきかけたにそなきとのたまへは

まつ人もあらしと思ふ山さとのこす系を

見つゝ猶そすきうきいふかひなき人の御こ
 とを猶つきせすの給てさまかはり給へ
 らんさまをいさゝか見せよと少将のあまに
 のたまふそれをたにちきりしるしにせ
 よとせめたまへはいりてみるにことさらに
 も人に見せまほしきさましてそおはする
 うすにひ色のあやなかにはくはんさうなと
 すみたる色をきていとさゝやかにやうた
 いをかしくいまめきたるかたちにかみはい
 つへのあぶきをひろけたるやうにこちたき
 すゑつきなりこまかにうつくしきおもやう
 のけさうをいみしくしたらんやうにあかくに
 ほひたりをこなひなとをしたまふなを
 すゝはちかききちやうにうちかけて経に心

64
才

63
ウ

をいれてよみたまへりさま系にもかゝまほ
しちうちみることになみたのとめかたき
心ちするをまいて心かけ給はんおとこ^はいかに
見たてまつり給はんと思てさるへきあり
にやありけんさましのかけかねのもとにあ
きたるあなをおしへてまきるへききちやう

なとひきやりたりいとかくはおもはずこ
そありしかいみしくおもふさまなりけるひと
をとわかしたらんあやまちのやうにおしくゝや
しくかなしければつゝみもあづすものくるお
しきまでけはひもきこえぬへければのき
ぬかはかり。さまし^ゑたる人をうしなひてたつね^ぬ
人ありけんやまたその人かの人のむすめ
なんゆくゑもしらすかくれにたるもしはも
のえんして世をそむきにけるなどを
のつからかくれなかるへきをなとあやしく

64
ウ65
オ

返々おもふあまなりともかゝるさまゝたらん
人はつたてもおほえしなと中へ見とこ
ろまさりて心くるしかるへきを忍ひたる
さまになをかたらひとりとてむとおもへは
まめやかにかたらふ・よのつね。さまにはおほ
しはゝかることもありけんをかゝるさまに
なりたまひにたるなん心やすきこえ
つへく侍さやうにをしへきこえ給へきし
かたのわすれかたくてかやうにまいりくるに
またいまひとつ心さしをそへてこそなどの

給・いとゆくすゑ心ほそくうしろめたきあり
さまに侍めるにまめやかなるさまにおほ
しわすれすとはせ給はんいとうれしくこそ
おもふたまへをかめはへらさんのちなんあ
はれにおもふたまへらるへきとてなき給
に・此あま君もはなれぬ人なるへしたれ
ならんと心えかたし・ゆくすゑの御うしろみは

65
ウ

いのちもしりかたくたのもしけなきみ
 な
 れとさきこえそめ侍なはさらにかはり侍ら
 したつねきこえ給へき人はまことに

ものしたまはぬかさやうのことのおほつかな
 きになんはゝかるへき事には侍らねと
 なをへたてある心ちし侍へきとの給へは・人
 にしらるへきさまにて世に経たまはゝさも
 やたつねいつる人も侍らん今はかゝるかた
 に思かきりつるありさまになん心のおも
 むけもさのみみえ侍をなとかたらひ給・こ
 なたにもせうそこし給へり

おほかたの世をそむきける君なれといとふ
 によせて身こそつらけれねんころにぶかくき
 こえ給ふこととおほくいひつたふはらから
 とおほしなせはかなきよの物かたりなと
 もきこえてなくさめんなといひつゝ・心ぶ

66
才66
ウ

かゝらん御物かたりなときゝわくへくもあらぬ
 こそくちおしけれといらへてこのいとふにつ
 けたるいらへはし給はすおもひよらすあ
 さましきこともありしみなれはいとと
 ましすへてくち木などのやうにて人に
 すてられてやみなんともてなしたまふされは
 月ころたゆみなくむすほゝれ物もののみおほ
 したりしもこのほいのことし給てのちより
 すこしはれ／＼しくなりてあま君とはかな
 くたはふれもしかはしこうちなとしてそあか
 しくらし給おこなひもいとよくしてほけ
 素経はさらなりことほうもんなともいとおほ
 くよみ給・雪深くふりつみ人めたえたる比そ
 けにおもひやるかたなかりける・としもかへり
 ぬ春のしるしも見えすこほりわたれる水
 の音せぬさへ心ほそくて君にそまとふと
 の給ひし人は心うしと思はてにたれと猶そ

67
才

のおりなとの事はわすれず

かきくらす野山の雪をなかもてもふり

にしことそけふもかなしきなとれいのなくさめ

のてならひををこなひのひまにはし給われ

よになくてとしへたゝりぬるをおもひいつる

人もあらんかしなと思出るときもおほかり・

わかなをおろそかなるこにいれて人のも

てきたりけるをあま君みて

山里の雪まのわかなつみはやし猶おひ

さきのたのまるゝかなとてこなたにたて

まつれ給へりければ

雪ふかき野辺のわかなもいまよりは君か

ためにそとしもつむへきとあるをさそお

ほすらむとあはれなるにもみるかひあるへき

御さまと思はましかはとまめやかにうちない

給・ねやのつまちかきこつはいの色もかもかは

67
ウ

68
才

らぬを春やむかしのこと花よりも是に

心よせのあるはあかさりし匂ひのしみにける

にやこやにあかたてまつらせ給けしうの

あまのすこしわかきがあるめし出て花をおら

すれはかことかましくちるにいとゝにほひくれは

袖ふれし人こそ見えね花のかのそれかと匂

ふ春の明ほのおほあま君のまこの紀のかみ

なりけるか此比のほりてきたり三十はかり

にてかたちきよけにほこりかなるさまし

たりなにことがこそおとしなとゝふに

ほけくしきさまなれはこなたにきていと

こよなくこそひかみ給にけれあはれにも侍哉

名残なき御さまをみたてまつることかたくて

とをきほとに年月をすくし侍よおやたち

物し給はて後のちはひと所をこそ御かはりに

思きこえ侍れひたちのきたのかたをはを

68
ウ

69
才

とつれきこえ給やといふはいもとなるへし・
とし月にそへてはつれ／＼にあはれる事
のみまさりてなんひたはいとひさしくを
とつれきこえ給はさめりえまちつけ給ま
しきさまになん見えたまふとの給に・わか
やのなとあいなくみゝと まるに・又いふやう
まかりのほりて曰ころになり侍めるをおほ
やけことのいとしけくむつかしくのみ侍に

かゝつらひてなんきのふもさふらはんとおもふ
たまへしを右大将とのゝ宇治におはせし
御ともにつかうまつりて故八の宮のすみ
たまひし所におはして曰くらしたまひし
故宮の御むすめにかよひ給しをまつとこ
ろは一とせうせ給にきその御をとつと又
忍ひてすゑたてまつり給へりけるを
去年の春又うせ給にければその御はて・
のわさせさせたまはんことかの寺の律師

69
ウ

になんさるへきことのたまはせてなにかし

もかの女のさうそくくたりてうしはへるへき
をせさせたまひてんやをらすへきもの は侍 いそ
きさせ侍なんといふをきくにいかてかは
あはれならさん人やあやしとみるとつゝ
ましうておくにむかひてゐたまへり・あま君
かのひしりのみこの御むすめはふたり と きゝし
を兵部卿の宮の北のかたはいつれそとのた
まへは・この大将とのの御のちのはをとりはら
なるへしこと／＼しくももてなし給はさりける
をいみしくかなしひ給なりはしめのはたいみ
しかりきほと／＼出家もし給つへかりき
かしなとかたる・かのわたりのしたしき人成けり
と見るにもさすかおそろし・あやしくやうの
物とかしこにてしもうせ給ひけることきのふ
もいとふひんにはへりしかな河ちかき所

70
ウ70
オ

にて水をのそきたまひていみじくなき
給きつへにのほり給てはしにかきつ
給し

見し人はかけもとまらぬ水のうへにおちそふ
なみたいとせきあへすとなん侍しことにあらはし

ての給ふことはすくなけれとたけしきには
いと哀なる御様になん見えたまひしをん

なはいみしくめてたてまつりぬへくなんわかく
侍し時よりいっにおはしますとみたてまつりし

みにしかは世中のいちの所も何とも思ひ侍
らすたゝ此とのをたのみきこえさせてなん

すくし侍ぬるとかたるに・ことにぶかき心もなけ
なるかやうの人たに御ありさまを 見しり

にけりとおもふ・あま君ひかる君ときこえ
けんこゐんの御ありさまにはえならひ給はし

とおほゆるをたゝいまのよにこの御そうそめ

71才

71才

てられ給ふなる右大臣殿とゝのたまへはそ
れはかたちもいとうるはしつきよらにすつ
とくにてきはことなるさまそし給へる兵部卿
の宮そいといみしくおはするやをんなにて
なれつかうまつらはやとなんおほえ侍など
をしへたらんやうにいひつゝ・あはれれにもお
かしくもきくに身のうへも此世のことゝも

おほえすとゝこほることなくかたりをきて出
ぬ・わすれ給はぬにこそはとあはれとおもふ

にもいとゝはゝ君の御心のうちおしはからるれ

と中／＼いふかひなきさまを見えきこえた
てまつらんはなをいとつゝましくそありける・

かの人のいひつけしことなとそめいそくを見
るにつけてもあやしめつらかなる心ちす

れとかけてもいひ出られすたちぬひな
とするをこれ御らんしいれよ物をいとうつ

くしくひねらせ給へはとてこうちきのひとへ

72才

たてまつるをうたておほゆれは心ちあし
とて手もふれすふし給へりあま君いそく

72
ウ

ことをうち捨ていかゝおほさるゝなど思ひ
たれ給ふくれなぬにさくらのおりものゝうち
きかさねておまへにはかゝるをこそたてま
つらすへけれあさましきすみそめなりやと
いふ人あり

あま衣かはれる身にやありしよの形見に
袖をかけてしのはんとかきていとをしくな
くも成なんのちに物のかくれなきよなりけ
れはきゝあはせなとしてうとましまて
かくしけるとやおもはんたとさまゝ思ひ

73
オ

つゝ過にしかたのことはたえてわすれ侍にしを
かやうなることをおほしいそくにつけてこそ
ほのかに哀なれとおほとかにの給・さりともし
おほし出ることはおほからんをつきせすへたて

たまふこそ心うせれこゝにはかゝるよのつねの
色あひなとひさしくわすれにければなをく
しく侍につけてもむかしの人あらましかは
なとおもひいて侍しかあつかひきこえ給け
む人よにおはすらんやかくなくなしてみ侍し
たになをいつこにあらんそことたにたつね

73
ウ

きかまほしくおほえ侍をゆくゑしらて思き
こえ給人く侍らんかしの給へは・見しほと
まてはひとり物し給きこの月ころうせや
したまひぬらんとてなみたのおつるをま
きはして中くおもひいつるにつけて
うたて侍れはこそえきこえてねへたては
何事にかのこし侍らんとことすくなにの給
ひなしつ・大將はこのはてのことなとせさせ
給てはかなくてもやみぬるかなと哀におほ
すかのひたちのこともおほかうふりしたるは蔵

74
オ

人になしわか御つかさのそうになしなといた
 はり給けりわらはなるか中にきよけな
 るをはちかくつかひならさんとそおほしたり
 ける・雨なとふりてしめやかなる夜きさ
 いの宮にまいり給へり御まへのとやかなる
 由にて御物かたりなときこえ給つゝめてに
 あやしき山さとにとしころまかりかよひみ給
 へしを人のそしり侍しもさるへきにこそは
 あらめたれも心のよるかたのことはさなんある
 と思たまへなしつゝ猶時々見たまひしを

所のさるにやと心うく思ふたまへなりにし
 後はみちもはるけき心ちし侍てひさしく
 物し侍らぬをさいつころものゝたよりにまかり
 てはかなき世のありさまとりかさねておも
 ふたまへしにことさらたうしんをゝこすへ
 くつくりをきたりけるひしりのすみかと
 なんおぼえ侍しとけいし給に・かのことおほ

74
ウ

し出ていとくをしければそこにはをそろ
 しき物やすむらんいかやうにてかかの人はな
 くなりしとゝはせ給を猶うちつゝきたる

をおほしよるかたと思ひてさも侍らんさやう
 の人はなれたるところはよからぬものなん
 かならずすみつき侍をうせ侍にしさまもいと
 あやしく侍とてくはしくはきこえ給はず・なを
 かく忍ぶるすちをきゝあらはしけりと

おもひ給はんかいとをしきおほされみやのも
 のをのみおほして其比はやまひにもなり給し
 をおほしあはするにもさすかに心くるしく
 てかたくにくちいれにくき人のうへとおほ
 しとゝめつこ宰相に忍びて大将かのひと

のことをいとあはれと思てのたまひしにいと
 をしくてうち出つへかりしかとそれにもあらさら
 む物ゆへとつゝましくてなんきみそことく

75
ウ75
オ

きゝあはせけるかたはならんことはとりかく
してさることなんありけるとおほかたの物か
たりのつゐてにそつつのいひしこと

かたれとの給はす・御まへにたにつゝませ給はん
ことをましてこと人はいかてかときこえさ
すれと・さまゝなることにこそまたまろはい
とおしき^ことそあるやとの給はするも心えて

76
才

おかしとみたてまつる・たちよりて物かたり
なとし給つゐてにいひいてたりめつらかに
あやしといかてかはおとろかれ給はさらん宮の
とはせ給しもかゝることをほのおほしよりてな
りけりなとかのたまはせはつましきとつら
けれと我もはしめよりありしさまの事き
こえそめさりしかはきゝてのちもなをゝこ
かましき心ちして人にすへてもらさぬをな
かゝゝほかにはきこゆることもあらんかしうつゝの
人々のなかに忍ぶることたにかくれある世中

76
ウ

かはなとおもひりてこの人にもさなんあ
りしなともあかし給はんことはなをくちをも
き心ちして・なをあやしとおもひし人のこと
にゝてもありける人のありさまかなさて
そのひとはなをあらんやとのたまへは・かのそ
うつつの山より出し日なんあまになしつるいみ
しくわつらひしほにともみな人おしみてせ
させさりしをさうしみのほいふかきよしをいひ
てなりぬるとこそは^傳べなりしかといふとこ
ろもかならずその比のありさまとおもひ

77
才

あはするにたかふゝしなければまことにそれ
とたつねいてたらんいとあさましき心地
もすへきかないかてかはたしかにきくへき
おりたちてたつねありかんもかたくなし
とや人のいひなさん又かの宮もきゝつけ
たまへらんにはかならずおほしいてゝおもひ

いりにけんみちもさまたけ給てんかしさて
 さなのたまひそなときこえをき給けれ
 はにや我にはさることなんきゝしとさるめ
 つらしきことをきこしめしなからのたまはせ

77
ウ

ぬにやありけん宮もかゝつらひ給にてはい
 みしくあはれとおもひなからもさらにやかて
 うせにし物とおもひなしてをやみなんづつし
 人になりてすゑの世にはきなるいつみの
 ほとりはかりをゝのつかからかたらひよるかせの
 まきれもありなんわか物にとり返しみんなの
 心はつかはしなと思みたれて猶のたまはず
 やあらんと思へと御けしきのゆかしければ
 大宮にさるへきついてつくり出てそけい
 し給・あさましくてうしなひ侍ぬとおもふ給

78
オ

へし人よにおちあふれてあるやうに人の
 まねひ侍しかないかてかさる事は侍らんと思

たまづれと心とおとろくしくもてはなる
 ることは侍らすやとおもひわたりは侍る人のあ
 りさまに侍れは人のかたり侍しやつにてはさ
 るやうもや侍らんとつかはしく思ふたまへら
 るゝとていますこしきこえて給ふ宮の

御ことをいとはつかしけにさすかにうらみたる
 さまにはいひなし給はてかの事又さなんと
 聞つけ給へらはかたくなにすぎくしくもおほ

78
ウ

されぬへしさらにさてありともしらすかほ
 にてすくし侍なんとけいたまへは・そうつ
 のかたりしにいと物をそろしかりしよのこと
 にてみゝもとゝめさりしことにこそ宮はい
 かてかきゝ給はんきこえんかたなかりける御
 心のほとかなときけはましてきゝつけ給は
 るむこそいとくるしかるへけれかゝるすちにっ
 けていとかるくうき物にのみ世にしられ
 給ぬめれと心うくなんとのたまはず・いと

をもき御心なれはかならずしもうちとけ世

かたりにても人の忍ひてけいしけんこと

をもらさせ給はしなとおほす・すむらん山

さとはいつこにかあらんいかにしてさまあしから

すたつねよらんそうつにあひてこそはたし

かなるありさまもきゝあはせなとしてとも

かくもとふへかめれなとたゝこのことをおき

ふしおほす・月ことの八日^にはかならずたうとき

わさせさせ給へはやくしほとけによせたて

まつるにもてなし給へるたよりに中堂に

は時々まいり給けりそれよりやかてよ河に

おはせんとおほしてかのせうとのわらはなる

ゐておはすその人ゝにはとみにしらせし

ありさまにそしたかはんとおほせとうち

みん夢の心ちにもあはれをもくはへんと

にやありけん・さすかにその人とは見つけな

79
才

79
ウ

からあやしきさまにかたちことなる人の中に
てうきことをきゝつけたらんこそいみしかる
へけれとよるつにみちすからおほしみたれ
けるにや

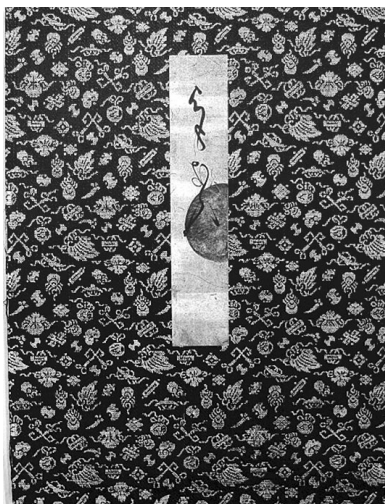
80
才

注

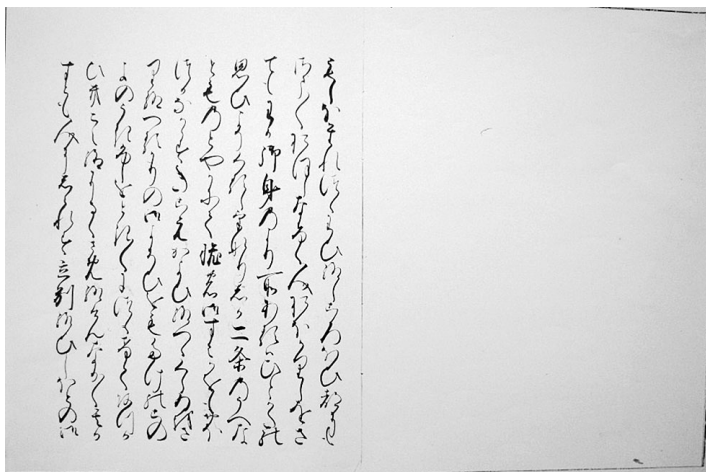
- (1) 「長谷川端蔵『源氏物語』源氏物語筆者目録 源氏物語秘訣」『文学部紀要』第四七卷二号（中京大学文学部 平成二五年三月）
- (2) 「長谷川端蔵『源氏物語』昌琢筆 桐壺」『文学部紀要』第四八卷一号（中京大学文学部 平成二五年十月）
- (3) 「長谷川端蔵『源氏物語』玄陳筆 昴木」『文学部紀要』第四八卷二号（中京大学文学部 平成二六年三月）
- (4) 「長谷川端蔵『源氏物語』玄的筆 空蟬 岡本主水筆 夕顔」『文学部紀要』第四九卷一号（中京大学文学部 平成二六年十月）
- (5) 注4に同じ。
- (6) 「長谷川端蔵『源氏物語』岡本主水筆 若紫 石井了俱筆 末摘花 左馬助筆 花宴」『文学部紀要』第四九卷二号（中京大学文学部 平成二七年三月）
- (7) 「長谷川端蔵『源氏物語』東寺觀智院筆 葵 岡本主水筆 賢木 北左平次行生筆 花散里」『文学部紀要』第五〇卷一号（中京大学文学部 平成二七年十月）
- (8) 「長谷川端蔵『源氏物語』大鳥居信岩筆 須磨 岡本主水筆 明石 潯標」『文学部紀要』第五〇卷一号（中京大学文学部 平成二八年三月）
- (9) 注8に同じ。
- (10) 「長谷川端蔵『源氏物語』岡本主水筆 橘姫」『文学部紀要』第五一卷一号（中京大学文学部 注6に同じ）
- (11) 注6に同じ。
- (12) 「長谷川端蔵『源氏物語』西山宗因筆 紅葉賀」『文学部紀要』第四六卷二号（中京大学文学部 平成二四年三月）
- (13) 「長谷川端蔵『源氏物語』西山宗因筆 宿木」『文学部紀要』第四七卷一号（中京大学文学部 平成二四年十月）
- (14) 注6に同じ。

- (15) 注7に同じ。
- (16) 注7に同じ。
- (17) 注8に同じ。
- (18) 注4に同じ。
- (19) 注3に同じ。
- (20) 池田亀鑑氏編著『源氏物語大成』第二冊（中央公論社 昭和五九年二月）
- (21) 財団法人日本古典文学会『尾州家河内本 源氏物語』第三巻
- (22) 池田和臣氏編『飯島本 源氏物語』第三巻（笠間書院 平成二二年二月）
- (23) 芳賀幸四郎氏『三条西実隆』人物叢書（吉川弘文館 昭和三五年四月）「四 大乱後の世相と和学への道」
- (24) 岸上慎二氏他編『日本大学蔵 源氏物語 三条西家証本』（八木書店 平成六年九月／八年五月）。「手習」に「以証本書写之老後之／手習無其益慚愧之／享禄辛卯正月廿日／逍遙老叟七十七歳／読合直付終了」とあり、「篝火」には、「享禄三八廿八書了九月十四了／五枚」と、実隆の奥書がある。
- (25) 古代学協会・古代学研究所編『大島本 源氏物語』第三巻（平成八年五月 角川書店）
- (26) 菅原郁子氏『正徹本の所在』『日本古典籍における「表記情報学」の基礎構築に関する研究』一号（国文学研究資料館 平成二四年三月）を参考。
- (27) 吉田幸一氏編『伏見天皇本影印 源氏物語四』古典文庫第五三九冊（古典文庫 平成三年十月）
- (28) 名古屋蓬左文庫蔵『源氏物語 青表紙本』五四巻、系図一卷・極一通 五五冊。里村紹巴自筆奥書 紹九等寄合書
- (29) 鶴見大学図書館蔵『源氏物語』五十四帖。鶴見大学図書館編『特定テーマ別蔵書目録集成三 源氏物語（鶴見大学図書館 平成七年二月）によると、鶴見大本は寛永頃の書写で「賢木」に「天正十四丙戌年／縦紹巴法橋請講釈本也」という奥書がある。

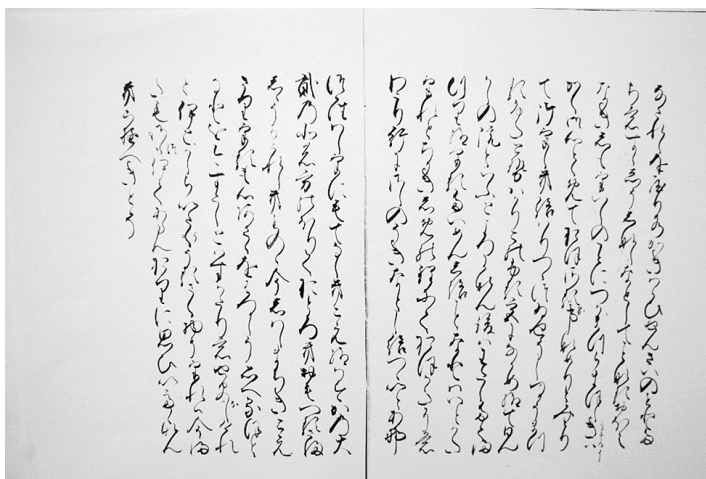
- (30) 山岸徳平氏・今井源衛氏監修『宮内庁書陵部蔵 青表紙本 源氏物語』(新興社 昭和四三年二月〜四五年八月)。「桐壺」に「此物語五十四帖以青表／紙証本令書与校合銘是／当代宸翰也殊可謂珍奇／可秘蔵々／権大納言藤実隆／(花押)」、「夢浮橋」に「此物語以青表紙／証本終全部之書／功者也／亞槐下拾遺小臣(花押)」と奥書がある。実隆が内大臣に任ぜられる永正三年(一五〇六)までに書写されているとわかる。
- (31) 名古屋市蓬左文庫蔵『源氏物語 青表紙本』五四巻、目錄二巻・極一巻 五六冊。「夢浮橋」に「此物語五十四帖相公羽林実世卿／借当時男女之手終一部之／書功須為万代不朽之家珍／而已／天文癸巳曆季夏下澣候／老比迫葬空書」と実隆の奥書がある。
- (32) 今井卓爾氏他編『源氏物語の本文と受容』源氏物語講座八(平成四年二月 勉誠社) 池田利夫氏「源氏物語の諸本」
- (33) 清水婦久子氏『源氏物語版本の研究』(平成一五年三月 和泉書院)
- (34) 吉田幸一氏『絵入本源氏物語考』上 日本書誌大系五三(青裳堂書店 昭和六二年一〇月)
- (35) 注32と同書に「承応絵入版は、それ自体後刷りされたが、後には、絵までそっくり真似た万治三年(一六六〇)刊の横本」とあり、「承応絵入版」(承応本)を採用したので、この万治三年の絵入本は除外した。
- (36) 伊井春樹氏編『萬水一露』二巻 源氏物語古注集成二五巻(平成元年二月 桜楓社)
- (37) 工藤進思郎氏編『首書源氏物語 蓬生 閑屋』(昭和六二年一〇月 和泉書院)
- (38) 伊井春樹氏他編『源氏物語別本集成』四巻(平成三年一月 おうふう)
- (39) 伊井春樹氏他編『源氏物語別本集成続』四巻(平成一九年六月 おうふう)
- (40) 注33に同じ。
- (41) 中村幸彦氏編著『策伝和尚送答控』未刊文芸資料第三期(古典文庫 昭和二九年一月)
- (42) 注41に同じ。
- (43) 鈴木棠三氏『安楽庵策伝ノート』(東京堂出版 昭和四八年九月)



蓬生 表紙



蓬生 1才



蓬生 終丁



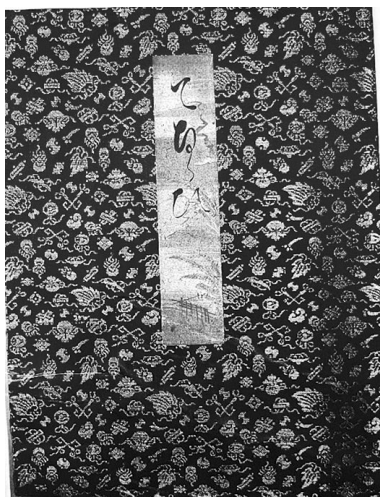
関屋 表紙

侍よりすけといひて二院をへせ給ての
 年ひつちよあてとてわががれききえ
 いさそいよけつすあはゆ旅おまほうま
 丁人いよなきいやわきこねるもあさ
 一かほく(きこゆ)きよすうまかくてはた
 は乃山をききすにききうまのち一は
 かのほくへうまきて年月わちわなわ
 きれるすまぢやいほふいねおれせ京かへ
 りすみ給てのあきすひかしてはほ
 けきせきいりも三殿へい山と作られた

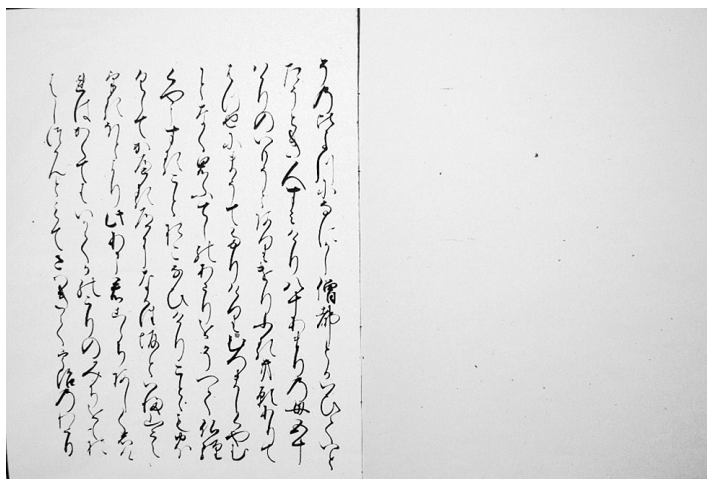
関屋 1才

ふまひをきかすあすともたけすま
 のふまきせよあはゆいさうよわていとおま
 きんをなれすきすてあるあすてか
 とまわてすてくもあつてききとせき
 まあふ人いよなきいよわて人よさ
 じとえきせてあきとちりはけあ
 いつちちとせりちけくかみき伊は
 ねいとい給ての乃この作のいふた
 初給ていひてすう給(き)なうあ
 のさうくやなとて給め

関屋 終丁



手習 表紙



手習 1才

